

平成二十八年四月五日（火）御命日五年式年祭

故野村頴璋美志道次秀貫歩大人五年祭偲び草

教会だより編纂（平成十一年一月号～平成二十三年五月号）

金光教土佐高岡教会

『明けましておめでとうございます』平成十一年一月号

昨年中は皆様のお祈り添えを頂いて、神様のおかげを蒙り、すべてにお繰り合わせを頂き無事に一年を終えることができ、ここに新しいお年を迎えできましたことは誠に有り難いこととございます。

ここにあらためて御礼を申し上げます。

本年も相変わります、よろしくお願い申し上げます。

本年も共に『世話になるすべてに礼をいふころ』を土台とした生

き方を進め、信心実践目標に取り組みつ、神人共に助かるおかげを頂いてまいりましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村颯璋)

『天地金乃神様のご大祭を迎え奉りて』平成十一年四月号

昨年までの春の大祭は『大祭』とだけ言ってきましたが、今年からは、金光教規の改正により、春の大祭は、『天地金乃神大祭』と祭典の名称が変わりました。

しかし、名称が変わったというだけで、別段祭典そのものが変わったり、

金光教が変わったという事はないのですから、安心してもらうていいと思います。

もともと春は、ご承知の通り、名称は『大祭』と申しております、内容は、天地金乃神様、いわゆる、天地の親神様の御大祭であつたわけであ

ります。

ただ、大祭をハッキリとする為に、春は『天地金乃神大祭』、秋は『生神金光大神大祭』とされたのであります。

『天地金乃神大祭』は、私ども人間はもとより、この天地の間に生きと

し生きるすべてのものを育み生かしてやまぬ働きであります。

その働きには、人間はもとより、動植物を始め命のあるもの、人によつては邪魔に思う存在であつても、天地金乃神様から見れば、大切な生命体であるわけです。

そういう一切のものをふくんだものの、それが天地金乃神様の働きであり、御神徳なのであります。

教祖様は「天地のなさに無駄」とは一つもない」とも、み教え下されておりますように、すべての御神徳を称え奉り、お礼を申しこれから

の立ち行きをお願い申し上げる御祭典であります。

四代金光様は「世話になるすべてに礼をいふところ」とみ教えになられ、生きとし生きるものはもとより、天地の間のすべての物を神様のお働きの賜物として頂き通され、一切の物に事柄に「御礼」を申され、私どもにその手本をお現しになられたのであります。

その御心は、現教主金光様にと受け継がれ、日々新たにお現しになられ、御取次下されておりますことは、勿体ないことであります。

いよいよ、御本部の天地金乃神大祭も三月二十九日から、四月十日までの五日間に分けてお仕えになります。

そして、当土佐高岡教会におきましては、四月十五日午前十一時よりご奉仕させて頂きます。

共々にご都合お繰り合わせを蒙りお引き寄せを頂かれまして、天地の親神様にお喜び頂ける信心を現させて頂きたいと思ひます。

(金光教土佐高岡教会長 野村颯璋)

『道理に合う信心』平成十一年七月号

金光教祖様は、『物の道理というものはなんでも一つである…云々…よ

く物の道理をわきまえて、道理に違わぬように信心せねばならぬ』と諭

されておられます。

今日では自分を大切にするとか自

由とか平等とかの名のもとに家庭から、社会問題にいたるまで、すべておこっていることに気付かずに社会や他人が悪いからと周囲のからにして自分の責任を逃れようとしています。

これはすべて天地の道理にあわない生き方による問題であり、難儀を

生み出す生き方であります。

人間の家庭の中に、大黒柱といわれる父親が不在となっており、教祖様は、男も女もない皆人間であると申され男女平等をあつ封建時代に解かれました。

しかし、人間として平等であるとは申されましたが、男女の役割まで

も同じとは諭されておられません。私ども金光教を信仰するものとして、「天地の道理」とはなにかをもう一度問い直し、道理に合う信心を次の二十一世紀に伝えたいものであります。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『立教百四十年 生神金光大神大祭を迎え奉りて』

平成十一年十月号

いよいよ土佐高岡教会の立教百四十年生神金光大神大祭を、十一月十五日にお迎えすることになりました。

十一月十五日はご承知のように教祖様が、天地金乃神様より立教神伝をお受けになられたお日柄であります。

して、まさに百四十年目の当日であります。

御本部広前におきては教主金光様ご祭主の下に、『立教記念祭』として執り行われるわけです。

教祖様は立教神伝をお受け後は天地金乃神様より、あらゆるご修行を

試され、それをことごとくおかげにして行われました。

それをごらんになられた天地金乃神様は大変お喜びになられ、いよいよ教祖様をご信頼になり生きながらにして、「生神金光大神」という御神号をお与えになられ、全世界の難儀

な氏子を取次助けてほしいと、教祖様に頼まれたのであります。

また教祖様もお頼みのままに、一生を只一筋に身命をかけて思し召しのままに御神願成就を願われ「氏子あつての神、神あつての氏子あいよかけよで神も助かり氏子も立ち行く」との人類の助かりの姿を身を以てお示し下され教祖様は「人類の助かるためならば、例えこの身が八つ裂き

にされても、辻々にさらし者にされても、屋敷に青草が生えても構わない」と申されて人類救済に尽くされました。

天地金乃神様は、「人民のため。大願の氏子助けるため、身代わりに神がさする、金光大神ひれいのため」と申されて、金光大神祭りのその日神上がりになられたのであります。

この天地の親神様の御神願、金光

大神様の御身命をかけての、ご布教に、ほんの少しでもお役に立たせて頂きたいとの願いを、日々の祈りの中に持ちたいものであります。

大祭当日の様々な御用に皆様ろつて、お使い頂きたいおかげ蒙らせて頂きましょう。

（金光教土佐高岡教会長 野村穎璋）

『謹んで新春のお慶びを申し上げます』平成十二年一月号

明けましておめでと〜いまます。

西暦二千年という歴史的世紀の節目に出会わせて頂けること、その上に『金光教独立百年』という教団にとつても記念すべきお年柄を迎え本当に

有り難いことでもあります。

さて、この歴史的節目・教団的節目を迎えて、改めてここからのおかげを蒙つてまいりたいと思います。

おかげを頂く目標としては、ここまで進めてまいりました教会の信心

実践目標を一層進めてゆくことが大切かと思ひます。

人間らしく生きていくということ、は、お世話になれば素直に「有り難う」というお礼の言葉が出て来るとが人間らしい生き方ができている

ということではないかと思えます。
今は何でも当たり前として片付けてしまい、困ったことを助けられても、人が困っておれば助けるのが当たり前として片付け、お礼を言わないというくらいになっているのです。

しかし、言葉の掛け合いというところが、言葉を持つ人間にだけに許された最も美しい行為であり、他人と

自分とを繋ぐ分かり合う行為でもあるのです。

これを忘れては、「人間を忘れた人間」になったとしか言えません。

せめて信心をさせて頂いている者だけでも、「この信心実践目標に掲げている、前教主金光様のみ教え『世話になるすべてに礼をいふところ』これこそ、人間の人間たらしめる生き方だ

と思えます。

言葉を掛け合う、お礼を言い合う、ここにはじめて、あいよかけよの生き方が生まれ、本当の人間関係が生まれ、おかげが頂けるものと思います。共々にここからのおかげを蒙らせて頂きましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村顕璋)

『天地金乃神大祭を迎え奉りて』平成十二年四月号

どなた様にも、有難いことであり
ます。

年に一度の天地金乃神様のご大祭を迎えるにあたり、今日までおかげを頂いてきていることのお礼を申し上げますと、共にここからの更なるおかげを蒙らせて頂きたいと思いま

す。

さて、天地金乃神様と唱える神様とは、どんな神様であられるのでしょうか。

それは、天地金乃神様の徳を現したものが八つ波の御神紋に現されているのです。

本教の御紋は、一般の家紋や社紋や宗紋教紋とは大きな違いがあるのです。

八つ波の御紋は神様ご自身が教祖様に御裁伝下さり、御創定なされたものでありまして、回りの八つ波は東・西・南・北・乾・巽・艮・坤にわけて宇宙

を現し、丸の中の金字がいっぱい書かれるのは天地の徳が宇宙にくまなく遍満している姿を現しているのです。このように天地金乃神様は私ども人間を始めあらゆる営みの源であり、生命そのものであります。

ゆえに教祖様は、天地の働きを天地の道理として、教え諭されたのであります。

天地金乃神様のご大祭をお仕えするということは、この働きあらゆる営みに感謝し、御礼を申し上げるのがご大祭であろうと思います。

それゆえに、忙しければ忙しいほど繰り合わせてご大祭には参拝させ

てもらわねばなりません。

忙しいから参拝できないというのは、神様にとっては、言い訳にすぎないのです。

忙しいというのはおかげを頂いているから忙しいのです。

『あるとき、大阪の方で商売をされている方が、金光様に「おかげを頂きまして忙しく参拝が無礼がちになります」と申し上げたところ、金光様が「それは相済まないことであります」と申されその方はそのまま列車に乗り帰宅に着いたのですが、金光様のお言葉をかみしめていると、これは大変なことだと気付かれて、御

本部に取って帰り、金光様にお詫びを申されましたところ、金光様から「それで結構であります」と申されたとのことであります。』

ご大祭を仕えるということは、お繰り合わせを頂いてお仕えするから真心になるのです。

なんの苦労も繰り合わせもなしに参拝できるのは真心になりません。

このご大祭を万事ご都合お繰り合わせを蒙られまして参拝できますことを、お祈りいたしております。

そして、なんでも一つご用にお体をお使い頂きましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村顕璋)

『天地の道理に合う信心を』平成十二年七月号

教祖様は、「悪い心を持つ者は必

ず、末にその報いが来る、すなわち、

天地の道理のおさえを受ける。

それは、今の裁判所の法律のごとくである。」

と、また、ある時の御裁伝に、
「神の上に天地の道理を教えられた。」

その御裁伝は『神は親子であるから氏子のことは許してやるが、天地の道理が許さぬ時は、どうする。』

『天地の道理が許さぬ時は、神もしかたがないぞ。』と教えられた。」

とありますように、今日では神様を誠にお人好しな、物分かりの良い人間に都合の良いような解釈がなされ、何をしても許されるかのごとくに言われていますが、教祖様は先へのべたように、天地の道理に逆らった

り、間違えた時は決してお人好しな物分かりの良い人間本意な考えなど許してはくれないのです。

神様と言うより先のお言葉の中にあるように、神の上に天地の道理があると申されて、人間の世界で言えば法律のようなものと教えられていますね。

法律というものは、曲げたり、悪いことをした者の都合がよいように解釈が許されないのと同じでありますよ。

してみれば、天地の道理に合わない生き方をしたり、考えをした時は、お叱りを受けるのは道理と言つことになりましょう。

ゆえに教祖様は、日々の教会への日参に勤め、おかげで生かされていることの御礼を申し上げ、天地の道理に合わぬ生き方考え方をし、あるいは、悪い心を出したりと、知らず知らずのご無礼をお詫び申し上げ、至らぬ中にも、少しでも天地の道理に沿い奉れる、信心の生き方になる稽古をさせて下さいませとお願い申し上げます。

そのことが誠に大切なことと思われれます。

日々稽古に励ませてもらいましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村顕璋)

『金光大神流の信心』平成十二年十月号

私どもは信心をさせて頂いている中で、常に考えて行かねばならないことは、自分流の信心になつてはいないかという点である。

私たちがさせて頂いている信心は金光大神が開かれた信心であるという点である。

金光大神の開かれた信心とは、生神金光大神御取次により、自分の生き方を金光大神流の生き方になるという点である。

ではどうすれば金光大神流の信心になるかということですが、それは、自分を捨てることから始まるのです。

金光大神様がおかげの受けられるようになったのは、人間であるから、どんなに行き届いたつもりでも神様

からごらんになれば、不行き届きなことばかりであるという自覚を持つて決して「これほど」という心はびれにも持たないのであります。

自分の思うように行かなくても決しておかげがないとは思わないのです。

それは、自分の信心が神様の御心に適わないからであると、どこまでも自分を戒め、そこから改まりに結び付けて信心を一層進められて行かれる。

金光大神流信心とは「これほど信心しているのに」という心は一切持つてない「どうしてこんな事になったのだろうか」という疑う心を一切持つてない「これで済んだとは思いません」「何一つ自分で出来ることはな

い」「何事もすべておかげの中のことである」というように、私どもの信心は、丁度これの反対の生き方になってはいませんか。

「これほど信心しているの」と思い「どうして神様は何の不足があつておかげを下さらないのであろうか」「こんなに（お礼）お仕えもしているのに」「何一つ間違つた事をした覚えはないのに」「これ以上神様は私に何をせよと言うのだろう、もう信心が分からなくなった」というような心になつてはいませんか、これでは金光教の金光大神流信心ではないのですからおかげがないということも当たり前のことです。

教会に参拝して、自分の意に反するようなことを言われたと言つて

は、腹を立てたりするようでは信心になりません。

金光大神様は神様からどんな不都合と思うような事をされても、どんなに意にそわなくても、決して腹を

立てたり、神様を疑ったりをしなかったのです。

それが人間としての信心修行と受け止められて信心を進められたのであります。

今日はあまりにも、自己主張が先に立っておかげを受けれる信心を忘れております。

気を付けて参りたいと思います。

(金光教土佐高岡教会長 野村颯璋)

『明けましておめでとうございます』平成十二年一月号

ここに平成十三年、西暦二一一年、

金光教立教百四十二年教団独立百一年、土佐高岡教会布教五十五年の新春を共々にお迎えし誠におめでとうございます。

日々天地の広大なるお働きを賜りて、生かされて生きていくことができ、ますことは、誠に有り難いことであります。

生かされて生きるということとは、すべてのものをそのままに受けきつて

生きていくことでもあります。

人生においてのあらゆる難儀も苦勞もそこから逃げるのではなく、それを生かしきる生き方が金光教の生き方であり、そこにこそ人間の生きる価値があるのです。

金光教祖様は、「人間は生まれる時に証文を書いてきているようなものである。」とお諭しになっておられますように、難儀も苦勞も生まれた時から決まっているのだといわれます。

決まっているのならそこから逃げ出しても逃げられないのです。

それなら、天地の大いなるお働きを受けて天地の道理に基づいた生き方をしていくしかないのです。

その道理をお示し下されたのが生神金光大神様であります。

難儀の中に苦勞の中に生き甲斐を見出し、喜びを見出し、難儀を難儀としない、苦勞を苦勞としない、喜びと感謝の心になる生き方こそ、われ人

共に助かる道であり二十一世紀に向けて進む生き方であろうと思ひます。

人を助けて神になる生き方、それはまず自分自身が本当の助かりが分

からずしては、人を助けるところにはなりません。

日々信心の稽古に励み、信心の喜び生き甲斐を見出して、人を助けることのできる人にならせていただき

ましょう。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『天地金乃神大祭を迎えるにあたりて』平成十二年四月号

いよいよ、今年も四月を迎え天地金乃神様の大祭月を迎えました。

さて、大祭は教会の先生が仕える祭りぐらいに思っている方もおられますが、大祭は信奉者全員のお祭りなのであります。

一年に一度の自分自身の信心を省みて、改めておかげを蒙って来られている自分に気付かせてもらい、その感謝の気持ちを真心に変えてお仕える。

また、自分の信心の至らなさに気付き心からのお詫び、ここから一層に人様の、また神様のお役に立たせて頂きたいとの願いを込める。

それを同じ道を求める者同志が心を揃えてお仕えし、このことが出来ることを共に喜び、感謝し、どういった今の自分であれ、天地の中に生かされて生きていることには間違いないのですから、一人一人が自覚して神様に一日を捧げお仕えるのが、大

祭であると思います。

大祭は先生のお手伝いをするのでありません。

自分自身の心(和賀心)のお祭りなのであります。

「お手伝いしましょう」ではなく、自分から「どうぞ私の真心を今日一日神様お使い下さいませ」というのが、集い合って天地金乃神様が本当に喜ばれる大祭だと思ひます。

よく私はなんの御用も出来ません

からと言ってお祭りぎりぎりに来られる方がおられますが、それは違います。

神様の御用とは、お料理だけが御用ではありません。

教会のお広前に来られて、立ったり

座ったりするだけでも御用になるのです。

そんなことをしたら邪魔になると思われるかも知れませんが、教会というところは、その邪魔と思われることも御用であり、それが教会の御比

礼なのです。

どうぞ、心を一つにして皆で喜び笑顔の絶えない一日となりますよう、祈りをこめて四月十五日のご大祭をお仕えさせてもらいましょう。
(金光教土佐高岡教会長 野村颯璋)

『あいよかけよの生活運動を受けて』平成十三年七月号

六月十日から始まった新運動は、何も変わったことを改めて、していうと言っているのではないのです。

今日まで進めてきていることを、改めて見直し進めて行くというのだと思います。

ではなぜ今改めてと思う時、一般社会では、ご承知のように、自己中心的な考えが横行し、人間関係を持ってない人が増え、家に引き籠もるよう

になるなど、誠に人間としての価値観を、失っているのです。

人間が他の動物と違うところは、話ができると言っていることであり、宗教心があり、どんな宗教無神論者でも、天地から与えられた心、苦しんでいる人を見れば、可愛そうに思っている心を持っております。

これは正しく宗教的な心なのです。

ですから、この世には、本当は無神論者は存在しないのです。

皆神様から(神様という抵抗を感じるのなら)皆天地からと、申してもよいのですが、賜りし可愛いと思う神心(天地の心)を持っているのです。

その心を素直に認めることにより、わが心の神に目覚めるのです。そして、その心はわがことのみなら

ず、人の難儀をもほつて置けなくなり、それが祈りとなり、対話となり、行動にも繋がっていくのだと思います。

神を現す生き方は、まず自分を先に出さない、どうすれば人が助かるか、物が救われるかを先に考えて、行動することだろうと思います。

そういう生き方が出来ていく時に、共に助かる世界が生まれるのではないでしょうか。

それは、自分の力や考えだけで出るのではないのです。

おかげを受けて、そうならせ下さいと、ひたすらに祈るしかないのです。

そこから生まれたものが本物の祈りであり、人の心を救う力ともなるのであります。

共々におかげを受けさせてもらいましょう。

（金光教土佐高岡教会長 野村顕璋）

『神を現す信心』平成十二年十月号

いよいよ十月を迎えると、すぐに御本部にありては、生神金光大神大祭をお迎えすることになります。

ご承知の通り九月二十九日は、教祖様の「ご生誕日」でございます。

そして、十月十日は教祖様がお隠れになられたお日柄であります。

どこの宗教にとりましても、大切

な大切なお日柄でございます。

ましてや、私どもにとりましては、教祖様がこの世に「ご生誕」あそばさなければ、金光教という宗教は生まれません。ですから、「ご生誕」があったればこそ、その日を忘れてはならないと思うのであります。

忘れないと言っただけでは足りない

ので、そこから大切になるのです。

大切なことは、教祖様が一生をかけて進められた、生神の道を進めることでもあります。

生神の道とは、教祖様がなされた、神を神と立てぬき、神と用いて、何事にも実意丁寧にして、すべての物を神様のお働きと受けて、すべてをおか

げの中のことと、お礼を土台としてのあられかたが、神様の御心に叶い、そこに神と人との、あいよかけよの生き方が生まれたのであります。

『神を現す信心』とはまさに、大変難しいことではありますが、神様のいう通りにし神様を神様と立て貫く、「神様を神様と立て貫く」ということは、どんなことでもすべてをおかげと受けて行くことであります。そこには、みじんも疑う心があつて

は「神様を神様と立て貫く」ことにはならないのです。

教祖様はそこをなされたのであります。

おかげを受ける人とおかげを落とす人の違いは、この一点に尽きると申せましょう。

『神を現す信心』といわれるのは、前教主金光様がお示し下された「何事もすべて神様のおかげの中での事であるからお礼を先に申して」と言

われる生き方でありましょう。

私も常には、このことに心をくばり「すべてに礼をいふこと」とみ教え下される金光様のみ教えを頂き現すことが『神を現す信心』だと思います。

ご大祭月を迎えて共に信心の稽古に励ましてもらいましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『新年に思う』平成十四年一月号

明けましておめでとうございます。

平成十四年の新春を迎え改めて思いますことは、人間が生きていくのに大切なことは、人と人の間に何が必

要なのかと思えます時、それは、「お世話になります、有難う」という感謝の心、相手を思いやる心、「すみません」と詫び心、人のことが祈れる喜び、祈られている感動、こういう生き

方がいよいよ大切になってくるのではないのでしょうか。

今日は誠に嘆かわしい限りの人間不信とでも申しますか、人と人のコミュニケーションの取り方が分から

ない人が多いように思われます。

それは、先に申しましたように、「有難う、すみません」とか相手を思いやる心のなさではないでしょうか。この心がありますと、自然に知らない人ともいつの間にか会話がでてくるものであります。

先に申しましたような心がありませんと、人間関係は誠にぎくしゃくした関係となり、人間としての本当の喜びは得られないのではないのでしょうか。

人間は言葉を持っております。

その言葉を掛け合うことによって人間になるのです。

神様は、人間には助ける働きを与えておられます。

それは、他の動物と違うところでもあります。

その違いは、言葉であり、知恵を用いてであり、力であつたりと様々な助け方があるのです。

その中でも一番だれでもできる働きが、話す言葉であろつと思います。しかし、その話す言葉を段々失いつつあることは誠に嘆かわしいこと

と思いませんか。

私も信心によつてその言葉の大切さを教えられております。

言葉は神様が『人を助けよ』との深い御神願がかけられているのだと悟りて、少しでもお役に立つ話をさせて頂くではありませんか。

賜りし言葉今日もお役に立たせ給へと祈りて思つ

思いやりの心言葉となり態度となりて人を救いおり

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『天地金乃神大祭を迎え奉りて』平成十四年四月号

いよいよ春本番を迎え、天地のすべての草木は芽を吹き、昆虫は地中から這い出して天地の息吹を感じ繁

殖期を迎え、草木は美しい花々を付けて競い合い、実に見事に天地の生き様を現され人間にその働きを実感し

感動させて下さいます。

この時節に天地金乃神様のご大祭をお迎えできますことは、毎年の事

ながら親神様の計り知れない深く厚き思し召しであるうかと思わされま
す。

天地のお恵み、お働きの中に私ども人間は生かされ恵まれてそれぞれの寿命を頂き、またあらゆるものにお世話になって今日を迎えておるの
でございます。

この事はなににもかえがたき有り
難いことであります。

人間生きている限り様々な事柄の中に精神的に難儀なことや苦しいこと、また肉体的にも痛いこと痒いことなど苦労は絶えることはありません。

しかし、生命というか寿命を頂いていることがもつともつと有り難いのであります。

難儀苦労苦しみ痛い痒いも皆生きている証であり、天地の働きを受けている証拠であり、どれほど御礼を申しても申し足りないことに気付かねばなりません。

よく参拝を御無礼する時の言い訳に、会社が忙しいからとか、仕事が休めないからと言いますがそれは参る心が無いことを仕事にかこつけて言い訳を言っているのですし、真の生命の有り難さに気付いていない人の言うことです。

どんなに忙しくてもその時に病気であつたら仕事も休むはずです。

身内に葬式が出れば仕事どころではないと申して休みますね。

信心の真とは、出来ないことを繰り返わせてお仕えさせて頂くことか

ら真が生まれるのです。

天地金乃神様の「大祭は、生命の源に御礼を申すのですから生命あつての仕事なのに、そこを取り違えているので真のおかげを落としてしまうのです。

健康であり仕事に恵まれているから御礼参拝に行かせてもらうのである。

共に力の入れどころを間違わぬようにしておかげを蒙らせて頂きましょう。

そして、心を込めて祈り、願い、お繰り合わせを頂いて御本部の天地金乃神大祭にそして土佐高岡教会の天地金乃神大祭にお引き寄せを蒙りお仕えさせて頂きましよう。

(金光教土佐高岡教会長 野村顕璋)

『生かされて生きる』平成十四年八月号

天地の間に生きるものすべてが、天地の働きを受けとおしに受けて、生かされているのであります。

この生かされて生きる生き方こそが、信心であるともいえるかと思えます。

では生かされて生きる生き方とは、どんな生き方をいうのでありましょうか。

これは信心の初歩であると同時に又、信心の究極でもあるのです。

天地の間で生きるすべての物が、自力で生きているというものは一つと

してないのです。

どんな物も、何かと関わり合って生かされているのであります。

それは動物であれ植物であれ、いや微菌や微生物に至るまでもそのようなのです。

このことに気づかされることが信心の第一歩であります。

このことに気がつきますと、すべてお世話にならねば生きられないことが判り、判れば感謝しお礼を申さずにはおれないと思うものであります。

この生き方が信心なのであります。

このことを四代金光様が「世話になるすべてに礼をいふ」とお示し下さったのであります。

信心の究極であるというのは、判つていてもこれが本当にすべてのお世話になった物にもお礼が申せるかといえ、申せない人がほとんどであります。

だからこそ日々信心の稽古が必要になるのです。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『生神金光大神大祭並びに立教記念祭を迎え奉りて』

平成十四年十一月号

初冬を迎え木の葉は紅葉で散り行き、朝夕は一段と寒さが身に凍みる季節となりました。

生神金光大神大祭は、教祖様御在世中から親神様の御神命のままに仕えておられた「金光大神祭り」の意義を頂き、お隠れになられた年記祭も兼ねると共に、世界・人類救済のために「生神金光大神」を差し向けられた天地金乃神様の願いと、永世生き通しの生神金光大神様の御取次をあらためて頂き、私たちが働きを現代社会に現していくことを祈願する祭典です。

また土佐高岡教会におきましては、安政六年十月二十一日「立教神伝」をお受けになり、天地金乃神様の

お頼みを受けられ、家業を止めて取次に専念せられたことに始まり、生神金光大神御取次の道が初めて人の世に開かれたのであります。

それを記念してお仕えするのが、立教記念祭であります。

教祖様の御時代は暦は旧暦ですから、それを今日の新暦に直すと「十一月十五日」となるのであります。

それで土佐高岡教会におきましては、丁度、生神金光大神大祭とお日柄が一緒でありますから、立教記念祭を併せてお仕えさせて頂くわけであります。

二つのお祭りを一度にお仕え出来ることは誠に有難い事であります。教祖様は一生をかけて「天地の道

理」を説き、天地の道理に基づく生き方でなければ真の人類の助かりは有り得ないと諭し、人類が助かるのなら「たとえ、この身は八つ裂きの仕置きにあい、村々辻々に曝し者となるようなことがあつても、私の屋敷跡に青草が生えるようになって、少しもいといません。

世界の氏子が『生神金光大神』と真心で一心に願えば、どのような願い事でもかなえてくださいます」とひたすらに願いぬかれたのであります。この尊い願いを私どもはひたすらに受け通しに受けており、おかげを頂いているお互いであります。

日々新たな心でお礼を申しながら、御神願成就のお役に立たせて頂

きましよう。

（金光教土佐高岡教会長 野村颯璋）

『教祖百二十年の新年を迎え奉りて』平成十五年一月号

明けましておめでとうございます。
す。

ここに、教祖百二十年のお年柄を
共々にお迎え出来ましたことは、誠
に有難いことであります。

教祖金光大神様は、一生をかけて
天地金乃神様の願いの実現に尽くさ
れました。その願いは私どもに「信心
しておかげを受け、人を助けて神に
ならせてもらうがよい」とお諭しに
なられ、また「ここに参ってきている
者は皆神の氏子である、生神とは、こ
こに神が生まれると言つことであ、この
方がおかげの受け初めである皆もそ
の通りにおかげが受けられる」とも

お諭しにられました。

このお道に御縁を頂き信心をさせ
て頂く者として一層信心の稽古に励
み「世話になるすべてに礼をいふこ
ろ」の信心生活を土台としてのあり
方を進め、われひと共に助かる生き
方をさせて頂きたいと思ひます。わ
れひと共に助かるためには、どうす
ればそのような生き方が出来るかと
常に求めて行く求道精神を養い続け
ることであると思ひます。

「我情我欲を離れて、真の道を悟れ
よ」と教え下されてある通り、信心
は他人（ひと）を見るのではなく、自
分の心を見る、人を改めるのではな

く、われを改めるために信心はする
ものであると申せましよう。人の心を
改めることは誰も出来ません。しか
し、自分を改めることは誰でも出来
るのです。人間には好き嫌いや、うま
が合う合わないが誰でもあります
が、信心して好き嫌いを無くし、うま
が合う、合わないを無くして行く。そ
こに信心の稽古があり修行があるの
です。この様に申している私がこの様
な心が強くて、人の心を傷つけたり、
困らせたりしております。

どうか皆様も共に稽古に励み、自
分では出来ないのですから、神様に
願いを祈りに祈り、共に改まらせて

頂き「ここに神が生まれる」と言う生き方にならせて頂き、われひと共に助かり立ち行く、あいよかけよの道

を進ませて頂き『人を助けて神になれ』とのみ諭しのおかげを蒙らせて頂きましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『天地金乃神様のご大祭を迎え奉りて』平成十五年四月号

平成十五年(教祖百二十年)のお年柄の中に天地の親神様の天地金乃神大祭をお迎えし、改めて天地のお働きを実感し感動し喜び御礼を申し上げます。

天地の間に生きとし生きる全ての命あるものは、生かし育てその働きには、何の差別もありません。

天地は真に平等であります。人間から見れば邪魔な存在のような、ネズミやゴキブリでも人間と同じ様に生かされております。

天地から見れば何一つとして邪魔

な存在というものはないのです。

人間は自分の意にそう沿わないで喧嘩をしたり、差別をしたり致します。

しかし、それでは何の解決も生まれません。金光教祖様は「天地日月の心になること寛容なり」と諭されております。例えば、頭から小便をかけられたら、温い雨が降ってきたともうておれ。叩かれたら叩いた手は痛うございませんかと相手の手をきづこうてやれ。と天地金乃神様の御心は、広大無辺であります。

この心になって信心をしると教えられているのであります。この心になれば楽であると言われるのです。宗教の中にも「目には目刃には刃」と言う教えの宗教もありますが、それは、宗教とは申せませんし、何の解決にもなりません。

どんな困難な中にも、相手を思いやり、相手と共に生きる道を生み出して行かねばなりません。

そこにこそ金光教の道があるのであります。それが天地金乃神様の御神願なのであります。

このお年柄にあたつて、天地金乃神様のご大祭をお迎えし先に申した親

神様の御心をわが心として、稽古に励みおかげを受けてまいりたいと思

います。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『馬鹿になり阿呆になつての信心』平成十五年七月号

金光教祖様は、ある方に「早々遠方から参つて」なくても、わが家で拝んでもおかげは受けられる」とみ教えになつておられますが、信心は何事も神様に素直が大事とは申しますが、中には、み教えに素直になつておかげをおとすことがあります。

このみ教えを、「『早々参つて』いでもよい家で拜んでもおかげを下さる」と言うのか、有り難い」と思つては、逆におかげをおとすことになるのです。

また私共も御用させて頂く時に、なるだけ若い方などには特に再々参

つてきなさいなどと言へば、それだけで信心を毛嫌いしては、せつかく御縁を頂いたのに信心そのものを止めてしまえばせつかくのおかげの道も切れてしまうと思ひ、そう申すことがよくありますが、本当におかげを受けたければ、毎日日参に勤め、み教えを頂き、馬鹿になり阿呆になつて、信心辛抱させてもらうしか、おかげを受けることはないのです。

信心の世界には、世間の常識では考えられないことがいくらでも起こつてまいります。

世間の常識では「一十一＝二」とな

りますが、信心の世界では「一十一＝十」にも「＝百」にもなるからです。

それには、忙しいからとか、都合が悪かったからと言つことでは、このおかげは受けられません。

どんな時でも神様を一位に立てて人から「アంతは教会の先生に騙されておるのではないか」と言われても、そこで信心がふらつくようでは、まだまだ一心ではないのです。

先に申しましたように、先生から「参つていでもよいから、家で神様に一心にお願いしなさい」と言われても、または「もう貴方みたいな者は

参つて来るな」と叱られようとも、そこで怯むようでは、おかげは受けられません。

先生から参つて来るなと言われようと、神様から参つて来るなと言われようとも『おかげ』を受けずに引き下がつてなるものか。

と言つぐらいの気構えが信心には

いるのです。

それには、信心辛抱しかないのです。

自分で辛抱をしたりするから、くたびれたり、嫌になったりするのです。

何事も自分がするのではなく、信心も辛抱もおかげでさせてもらうの

でなければ続きません。参拝もそうです。

おかげでお引き寄せを頂くのです。

一切をおかげでさせて頂くという心が大切です。

おかげを頂きましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『教祖百二十年 生神金光大神大祭をお迎えして』

平成十五年十月号

秋も段々と深まり、実りの秋を迎

えるとともに御本部広前にありては、いよいよ、教祖百二十年生神金光大神大祭の月を迎えることとなりました。

そして、その御比礼を受けて、地方のそれぞれの教会でも、お仕えさせて

頂くのであります。

教祖様ご存命中に、「この方は、新暦と旧暦が連れ添うてゆく時がある。その時に形を隠して御簾の中に入る。」と言われ、「形がのうなったら来てくれいと言つ処に行つてやる」と永世生きどおしの取次の神となられ

ることを、私どもに約束をして下さつたのであります。

昔も今も何も変わる事なく私どもが一心に「生神金光大神様」とお縋りする時、直ちに來て下さり助けて下さるのであります。

これから世の中がどんなに変わ

ることがあろうとも、変わることもなく、私どもが「生神金光大神様」と言うことを忘れない限り、その働きは現され助けて下さるのであります。教祖様お隠れになられ教祖百二十年、代を重ねる中にも変わることなく「生神金光大神御取次」の御働き

は、現され私どもが日に日に新たに助けられているのであります。この変わらぬ取次の働きに御礼を申し上げ、さらに、ここからのおかげを受けて助かってまいりたいと思います。教祖様が「人を助けて神にならせてもらうがよい」とのお諭しを真に

頂き神様のお役に立たせて頂きたいと思ひます。
このような願いに立たせて頂くという事が、教祖百二十年生神金光大神大祭をお仕えするという意義ではなからうかと思ひます。
(金光教士佐高岡教会長 野村穎璋)

『生命(いのち)を生かす生き方を求めて』平成十六年一月号

明けましておめでとうございませす。

ここに平成十六年の新春を共に迎えることができましたことは誠に有り難いことであります。

昨年は、今の教主金光様は『世界の平和と人類の助かり』をと願われております中にも、その思し召しとはかけ離れた世界情勢でイラク戦争を

始め世界のあちこちでの小競り合いの紛争が絶え間なく、日本国内においても親子での殺しあい、幼児への虐待、あげれば切りがないほどの人間の在り方生き方を問われた一年でありました。

天地の親神様がご覧になられて、どれほどの悲しみとお嘆きであられたのではないでしょうか。

宗教によつては、聖戦と称して神様の名の下に宗教同志が戦争を何百年何千年と続けているものがあります。が、どんな神様でも聖戦などという争いを喜ばれる神様はいないのです。それぞれの宗祖教祖の思想が我情我欲による、信奉者獲得のために神様を出しにして争いを起こしているのです。

私ども金光教信奉者は「あいよかけよで立ち行く」との道を頂いております。教主金光様の願いである『世界の平和と人類の助かり』を我々自分の願いとして、日々の祈りの中に願ってまいりたいと思います。

生活の中に『世話になるすべてに礼をいふところ』との信心を土台として、生かされて生きる喜びを知り、天

地のあらゆる物のお働きによって生かされる事への感謝、あらゆる物の生命(いのち)を大切に生かして行く在り方、自分の生き方と他人(ひと)の生き方の違いを

共に認め合いつつ、自分の生き方が他人(ひと)への迷惑にならない、不快を与えない生き方をさせてもらう『あいよかけよ』の金光大神の道を頂

き直して、人間本来の生き道として、生神金光大神御取次の道を求め直し道を立てる生き方を現し、現代社会の人間性を失い、本能のままに生きる事を自由だと思い違いをしている人々に、真の生き道を分かつて欲しいとの強い願いを共に頂き、祈ってまいります。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『天地金乃神大祭を迎え奉りて』平成十六年四月号

いよいよ、春を迎え厳しかった冬の寒さから解きほぐされて、春の野山は色とりどりの花が咲き乱れ、草木は芽吹き、天地の息吹を実感しつつ、私ども人間もまた天地の中に生かされて生きています。

四月は、金光教では天地金乃神大

祭月であります。ご本部広前のご大祭に始まり、その御比礼を地方では頂いて、金光様のご祈念の中でお仕えさせて頂くのであります。

私どもは自覚するしないにかかわらず、神様のお働き、金光様のお祈りを受けておかげであらゆることが出

来ているのであり、自分の力で出来たというものは何一つとしてありません。

そのことに気づかせてもらい、お礼を申し上げるのがご大祭であろうかと思えます。

四代金光様は「何事もおかげの中

でのことでもありますから、お礼が大
事であります」とみ教えになつてお
られます。

さて、お礼を申すということであ
るが、とにかくこのお礼の思い違い取り違
いをしておられる方が多いのではな
いでしょうか。

金光教のお礼は、他宗教のように
物や金をお礼にお供えしなさいと申
しているのではないのです。

「物や金ではおかげの元にはなら
ない」と教祖様はみ教えになつてお
られます。

神様のお礼ということとは、どんな
時でもおかげを頂いていることに

気づいて、有り難い、勿体ない、恐れ

多いという、物金に変えられない、感
謝の心とでも申しましょうか、そうい
う心なのであります。

親神様のご大祭をお仕えするとい
うことは、日々生命を頂き生かされ
ておることに感謝申し上げずにはお
られないという心になつて、参拝して
仕事に恵まれていること、仕事が出
来ること、健康でいられること、病気
の中でも生かされていること、などな
ど数え上げれば切りのないほどの、
おかげを頂いているものです。

そこでこのおかげを頂いている身
体をもつて、神様のご用に使うて頂く
のであります。

神様のご用とは、お祭り前の諸準

備を始め、参拝、直会、片付けなど何
か一つでも身体を神様に使うて頂き
たいという心が、結集されて神様が
お慶びになられる「大祭となり、そ
れが教祖様がみ教え下されてある
「神に仕えたことは神はただ取りは
しない、何増倍にもしてかえしてある
ぞ」と申され「一日損をしたように思
うけれども神様は直ぐに取り返して
やる」ともみ教えになつておられま
す。

有り難いことであります。

どうか皆様、真心を尽くし天地金
乃神様に喜ばれるおかげを共々に頂
かせてもらいましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村顕璋)

『天地と共にある我』平成十六年七月

私どもは、この世に生まれ出てから今日まで誰一人として、一分一秒たりとも天地のお世話にならずに生きてきた方はございません。

信心するしないに関わらず天地と共に生かされ生きて今日を迎えているのであります。

この世の中のこととは皆天地の働きの中で何もかもが出来ているのであります。

ところが一つだけ天地がなさらぬものがあります。

それは人間が我情我欲で生み出した争い、名誉、面子(めんづ)など様々な欲望から生み出されたものがございます。

これは天地の働きから生まれた問題難儀ではないのであり、この難儀は

いくら辛抱しても助かる道は開かれません。

天地によつて起こされた問題難儀は、信心辛抱により道は開かれて参ります。

金光大神様は「時節を待たず苦をする」「四季の変わり人は人の力にはおよばざるものぞ」ともみ教えになつておられますように、信心をさせてもらい神様のおかげを受けてじつと辛抱をさせてもらう、私ども人間はとにかく早く難儀から救われたいと思ひ焦りすぎて、おかげの時期が来ないのに「早く早く」言つて、「おかげがない」と言つて、神様に不足や不満を言うたり思つたりして、「ご無礼を重ねております。

不平や不満、愚痴などを申したり

しておりますと、折角おかげが現れても、そのおかげを取り外すことになつていたのであります。

金光大神様は「神様は、氏子の身の上、に、けつして無駄事はなされぬ、みな、末のおかげになるぞ」とみ教え下されてありますように、信心辛抱をさせてもらいながら御時節のくるのを待たせてもらうことでもあります。

この御時節を待つというのは、ただじつと待つものではありません。

「信心辛抱」と言われるように、『信心』が大切であります。

信心とは、拜むだけではありませ

ん。
み教えを頂き、そのみ教えを生活の中に実践しつつ、辛抱させてもらうことでもあります。

そこから、道が段々と開かれておかげの道がついて参ります。

では、人間の我情我欲による難儀を引き起こした時は、神様をお願いするより先に、お詫びが大切となります。

神様の御心に沿わぬ生き方、人を責めたり、軽く見たり、人を当てにしたり、その上にどれ程の徳も無いのに名誉を重んじたり、面子を重んじたりして、難儀をしているのであります。

す。

名誉や面子を重んじる方は、自分の力でこれだけの事をしたという思い上がりがあるからで、それが難儀のもとになっていることに気づかずにおるからであります。

そこに気づき、天地のお働きを受けて出来たことに感謝し喜び、人様がいてさせてもらえたのであると言うことを忘れておるところに難儀が現れてくるのであります。

難儀を生まない生き方とは、「天地と共に生き、信心させてもらいつつ、辛抱を天地と共にさせてもらい。人様がおられるから、何事もさせてもらえたのである。自分一人の力で出来たのではない、すべての働きを受けてさせてもらったのである。」と言う謙虚な心にならせてもらえば、すべてがおかげになって参ります。

(金光教士佐高岡教会長 野村穎璋)

『生神金光大神大祭をむかえ奉りて』平成十六年十月号

秋も段々と深まり、曼珠沙華の花

が咲き、コスモスが咲き乱れ、そして、山は次第に紅葉し始めてくると、御本部広前では生神金光大神大祭が教主金光様ご祭主の下にご奉仕になら

れます。

全国の信奉者は十月一日、五日、七日、十日と四回にわけて仕えられる参拝日に、それぞれご都合お繰り合わせを蒙りお引き寄せを蒙るので

す。

今から考えると二十年前までは、御本部参拝は金光の旅館で一泊して、到着した日は午後四時四十分の教主金光様のお引けをお見送りし、

そして夕食後は祭場でのお説教を頂き、朝は、午前3時頃に起床して、三

時五十分の教主金光様のお出ましをお迎えして、共に朝の御祈念を頂き、その後朝のお話が祭場で行われ、そして朝食を済ませて、午前九時二十分からのご大祭までは皆、自由におみやげを買われたりして、祭場に集合して御祭事を頂き、終了後十一時頃より金光を出発して帰途につき、バスの中では今と違い、七、八時間くらいかかりましたので、歌をつたい、飲み食いしながら楽しく帰ってきたことが、今はかえって懐かしく思い出

されます。

二代金光四神様のみ教えに、

「神がおかげを蒙らしてやろうと思つても、段々と交通が便利になり帰るのを急いで、金光にはおかげを受けに来るのではなく、小便をしに来るようになっておかげを落とすぞ」とお諭しになっていきますが、まさにその通りになってきています。

教会の大祭でも御用に当たられるご信者さんは限られ、参拝者皆で御用させてもらい、お祭りをわが事としてお仕えしようと言つ人が段々少なくなりました。

ご大祭参拝は、御祭事に行けばお参りが出来たのではなく、朝から教会に参拝して何でも構わない自分の出来る御用をさせてもらうのです。これが、おかげとなつて神様、金光様が喜ばれる信心にもなり、御比礼が輝くのです。

土佐高岡教会の生神金光大神大祭は十一月十五日です。

今から願いをこめて、今日までのおかげのお礼の御用に当たらせてもらいましょつ。

(金光教土佐高岡教会長 野村頼璋)

『天地の道理は人間の生き道』平成十七年一月号

明けましておめでとついでいます。

ここに平成十七年(立教百四十六年)の新春を迎えましたことは誠に有り難いことでもあります。

教祖生神金光大神様は、

『人間は万物の靈長であるから万物を見て天地の道理に合う信心をせねばならぬ。』

とみ教え下されております。

また、天地の道理とは、

『国に例えれば法律のようなものである。』

『国の法律を犯した者は裁判によってその罪を裁かれて監獄に入れられるように、天地の道理を犯した者は助けてやりたいと神が思っても神にもどうにもならない、それはお上でも改まったから直ぐに罪を許して放免とはならぬのおなじである。』
と言われております。

そこで生神金光大神様を天地の親神様がこの世にお差し向けになられて、天地の道理を教えて罪を犯さな

い人間の生き道を教えて下されたのがこの道、金光教であります。

とかく、人間は不幸が続くと、

「何にも悪いことはしてないのに何で私ばかり難儀するのでしょうか？」

というて来る人がありますが、金光大神様は、

『人を殺したり盗人をしたりせねば、悪いことはしてないと思っているが、人に良いのと神に信心しておかげを受けるものとは別物である。』
と教えられております。

信心しておかげを受けれると言う事は、金光大神様がお諭し下されてありますように、天地のあらゆる恩恵を受けて生かされていることに感謝し、人を恨まず、何事にも不平不足に思わず、四代金光様が、

『世話になるすべてに礼をいふこと』

とお示しください、

『何一つ世話にならねばなし得ざる／われぞとおもふ世話になりつつ』とお歌にもお読みになられております通り、ここが大切で、難儀を生み出すか、喜びを生み出すかの、信心の要であります。

「おかげを受けて何事にもお世話になつて」というお礼と感謝の心を見失うことないように、常に生活の中に祈りをこめて、天地の道理に叶った生き方を、身に付けさせて頂きましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村顕璋)

『天地金乃神大祭を迎えて』平成十七年四月号

冬の寒さをじつと辛抱していた、野山の草木は一斉に新芽をふき、花を咲かして命を育み、天地の息吹を体感し、人間も心が何となく華やいで次々と咲き乱れる花を愛で楽しみ天地の御働きを感じずにはおられません。

この天地の躍動を実感できる季節の中に、天地金乃神様のご大祭を迎えお仕えできることは、何と素晴らしい事でありましょうか。

この素晴らしい天地の御働きを実感するとき、厳しき寒(かん)の寒さに耐えて命を育み季節の移り変わりを体感するとき、人間は喜び天地に

感謝せずにはおられません。

この喜びを感謝し形に現して御礼を申さずにおれない心を現して行くのが天地金乃神大祭であります。

病気であつても、どんな難儀のなかにも、生命を頂いていると言う事実をしっかりと受け止めなければなりません。

そして、そこに天地の道理を観なければならぬのです。

生かされて生きている眞実、これぞ正しく天地の道理であり、生かされてある喜びを得るとき、ここに神が生まれるといわれる金光教の信心が生まれるのであります。

どんな難儀や病気のなかにも、生かされて生きている喜びをしっかりと受け止め、この有難い喜びを、御本部に、また教会に参り共に「ご大祭をお迎えせずにはおられない」と言う心のおかげを受けさせてもらいたいものであります。

おかげを受けて おかげに気付かず
神に不足をいふ人多し

神へのお礼は物金ではお礼にならず
どうしても参つて行かねば相済まぬと
の心なり

(金光教土佐高岡教会長 野村頼璋)

『神の心を知っていますか』平成十七年七月号

私ども人類は金光大神様がご出現されるより遥か昔から、何かと人間の力を超越した働きを信じて、それを神または仏として崇め、その力に縋りての生き方を信心と申してこられたところがあります。

そこには人間の願いのみを神や仏に聞いてもらって、願いを叶えて貰うことが信心の究極の処であるかのようについて次から次へと願い、その願いが思うようにならなくなると神様や仏様にこれほど信心をやってやっているのにおかげが無いといって、不平や不満愚痴を神様や仏様に申し立てるのです。

それは金光教祖様がこの世にお出まし下されて始めて、信心は人間の願いばかりをお頼みするだけが信心

ではなく、神様の思いあるいは神様の願い、神様の心を知って信心をさせてもらうことが、真の信心であるということを私ども人類に教えて下さったのであります。

それでは神様の心とはどのような心のことでありましょうか。

金光教教典を開いてみますと、神様は人間を神の氏子としてその御心は「可愛いと思う心」ただ一筋であります。

その御心を分かって欲しいとの思いを、いろんな事柄や例えを以て分かりやすくみ教えになっておられるのであります。

「いろんな難儀に出会っても、神様はけっして人間の身の上に無駄ごとをさせられない」とか「人間がおかげを

受けて立ち行かねば、神も金光大神も立ち行かぬ」

「不幸せな人間ほど神様はふびんである、難の多い、不幸な者ほど、おぼしめしが強い」

「神の心を知らないでいる者ほど可愛いと仰せられ、不信心者ほどふびんでならない、信心して神の心を知っておかげを受けてくれよ」

このような心が神様の御心である。

天地の中に生かされて生きていることも、天地一切の営みが神様が人間を愛してやまない御心であることを知り、何事にも御礼を土台にしての信心の生き方をさせてもらうことが大切であると思います。

(金光教土佐高岡教会長 野村頼璋)

『信心辛抱からのおかげ』平成十七年十月号

金光教は、教祖生神金光大神様が日々の生活の中で、実意丁寧神信心をなされ、家庭生活や隣近所との付き合いの中から、信心を通して得られた生き方の体験を元にして語られたお話が、み教えとなつて教祖様のところへ訪ねてこられる方々に、お話をなされた真実の生き方なのであります。

教祖様は信心しておかげを受けていることを土台にしてのお話でありますので、そこには人間の知恵を越えたものであり、訪ねる人々を心を納得させずにはおかぬものがあつたと思われます。

教祖様が出合われた神様「天地金乃神」は一般の方々が拝まれるように人間の一方的な勝手な願いを聞く

神様ではなく、あくまでも「天地の道理」に基づいた生き方を求められ、その天地の道理に基づいた生き方になるまでは神様ご自身がじつと人間を見守り下されて、分かってくれよと親の心を持たれて願われるのであります。

その御心をお受けなされ、諭し下されるのが生神金光大神様のお取次であります。

私共に神様の願いがどこにあるのかを教えて下さり、導いて下さる。

そこにはまた神様と同様に、人間が天地の道理に基づく生き方になるまで、金光大神様もじつと見守り、辛抱して下されているのです。

そして、その金光大神様の手代わりとして、御用を日々下さる親先生

も、また同じように人間の助かりを祈り続けて、辛抱下されているのであります。

私共だけが苦労や難儀で辛抱しているのではなく、それ以上に天地の親神様が、金光大神様が親先生が信心辛抱下されてあることを知り、素直な心となつてみ教え下さる天地の道理に基づく生き方を、させて頂きたいものであります。

その心になるとは、自分という自我をすみやかに気づき、何事も神様の思し召しと捉えて、

「神様は人間を困らせたりすることはない。天地のなさることに何一つも無駄事はない。」との思し召しを頂き、

「世話になるすべてに礼をいふ心」を

土台にした、信心辛抱をさせて頂き、ご時節を蒙りおかげを頂いて、おかげの実感を得て、忘れようとて忘れられない感動のおかげを蒙り、そこか

ら神様の願いであります、「一人助ければ一人の神、十人助ければ十人の神」と願われる、生神の実践が展開されてまいりますように願わずにはお

れません。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『新年に思うこと』平成十八年一月一日

どなた様にも、明けましておめでとうございます。

昨年中は何かと皆様方にはお世話になり、ありがとうございました。

今年は土佐高岡教会は先の教会長、野村トヨ初代教会長が、この高岡の町に昭和二十一年九月二十三日に金光教を布教されて、六十年のお年柄をお迎え致します。

初代教会長として何を布教するのに、女の身で高岡に来られたのでしょうか。

それは一念に人を助けたいという心、ただ一つでありました。

その信念たるや並大抵のものではありません。

それは女を捨て人間の持つ我情我欲を捨て去り、教祖金光大神様が願われました「人が助かりさえすればそれで結構である」とのご精神を頂き、高知教会初代教会長道願縫(ぬい)先生が教祖様より賜わりしお言葉「女の一心岩をも通す」との御心を頂き、難儀な人々を助けてやりたい

と寝食を忘れて、一筋に祈る姿に大勢の人々が心を打たれ、参つてきた人が次々と助けられ、金光教の素晴らしい教えに心の目が開かれ、次々と伝えられて、ここに今年六十年の節年をお迎えするのであります。

さて、ここから私共は一層に信心を進めさせて頂き、一人でも多くの人々に金光教を知って頂き、助かつて貰いたいとの思いを祈りに変えて「人を助けて神にならせて貰うがよい」との生神金光大神様の御心を頂き、

少しでも神様のお役に立たせて頂きたいと思うのであります。

皆様におかれましても願いをいつ

にして取り組ませて貰いたいと思います。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

す。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『天地金乃神大祭を迎え奉りて』平成十八年四月号

昨年のお暮れより大変厳しい寒さが続きましたが、昔からのことわざに「暑も寒さも彼岸まで」と言われるように春分の日も過ぎて春らしいうらかな陽気となり、過ごしやすい気候となつてまいりました。

この気候の働きこそが、天地の生きている証であります。

天地が生きているから、あらゆるものがまた生きていられるのであります。

そこに気づかれた方が教祖生神金光大神様であり、まさに天地の中に

あらゆるものが生きているのではなく、生かされていることであつたことを悟りてみると、天地の働きこそが生命の源であるのです。

また天地には「天地の道理」があり、それに背くことはどんなに人類が逆らつても変わるものではないといふことなのです。

それを金光大神様は「四季の変わり人は人の力におよばぬことぞ。物事、時節に任せよ。」「天地のことは、人の眼をもて知りて知りがたきもので。恐るべし恐るべし。」と諭されたので

あります。

その働きは生かされて生きているもの、すべてに平等に働いてあると言われ、またあらゆるものに世話にならねば生きていけないことも諭し「信心する者は、山へ行つて木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言つ心持ちになれ。」と諭して下されたのであります。

この尊い働きに生かされている者として、心から感謝を申し上げるお祭りが、年に一度の天地金乃神様の「大祭であります。」

誰一人として天地金乃神様にお世話にならずに生きているのではないのでありますから、一同打ち揃って参

拜して、共々に御礼の真を捧げたいものであります。

共におかげを頂きましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『神様を身近に頂く』平成十八年七月号

一般的には神様や仏様は、天にいたりとか、お社におられるとか、像にいたりとか申しますが、果たしてそうなのでしょうか。

神様や仏様がそんなものであるとするならば、お社や仏像などの前にいて祈りを込めている時以外はおかげは受けられないということになりませんか。

おかげがいるのは日々の生活の現場でいるわけですから、それでは困るわけです。

そのことについて金光教祖様はこ

のように教えられております。

「天地金乃神のご神体は天地である。宮社に鎮まり納まつておられるのではない。」

真一心の心に神がおられて、おかげになる。」

つまり「天地金乃神様は、天地宇宙が神様のお体の中であるから、一心にどこを向いて拜んでも、神様は我が心におられるのであるから、おかげになる。」とみ教えになつておられます。

神様や仏様は遠いところや、お社

仏像に止まっているのではない。

一心に祈る我が心に神様が宿り、おかげの道に導いて下さるのであります。

でありますから、神様と人間は一心に祈る時、そこには神様と人間のあいよかけよの働きが生まれ、神様を一層身近に感じることが出来るのであります。

おかげを受けたとか、おかげが受けられなかったとか申しますが、おかげは受けたり受けられなかったりするものではなく、祈る者の心次第で

はないでしょうか。

どれほどおかげを受けましても、祈る本人がおかげを現さなければおかげにはなりません。

他人様が見て信心していてあのような苦勞をするくらいなら信心はしたくないと申す人もありますが、それは信心とかいうものを諺のように「困った時の神頼み」くらいにしかと

らえていない人の言うことであります。

信心の本質は、どんなに難儀や苦勞があつても、今生がされていることの喜び、どんな中にもあらゆるものにお世話になつて生かされることの尊さを知ることが、我が道の信心の有り難さではないでしょうか。

今日も「ありがとう」「お世話にな

ります」という心になれますように、自分の力や考えで出来るものではありませんから、「生神金光大神様、天地金乃神様、おかげで日々ただ今、ありがとう、お世話になります」という心を頂かせて下さい。」と祈りましょう。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『お礼の信心をさせて頂こう』平成十八年十月号

今年の、九月二十三日は土佐高岡教会の初代教会長野村トヨ親先生が、この地に布教以来おかげを受けて六十年のお年柄を迎えました。

この記念すべきお年柄を迎え、私共はこれから何をどう進めていかせてもらうかということが、誠に大切に

なつてまいります。

それはもう御礼の信心をさせてもらうことしかないのではありませんか。

御礼の信心とは、自分の思いが適えられたから御礼を申すと言うのでは、本当の御礼の信心にはなりません

ん。

願いが適えられなくてもお礼を申し上げることは沢山あります。

まず第一に生かされある尊い生命の御礼を、どんな時でも忘れてはならないことであります。

それはこの地球上に生きている生

命あるすべてのものに言えることでもあります。ありますが、わけても人間を生神金光大神様は「天地の間に住む人間は神の氏子」とお諭し下さいました。

天地宇宙を司る神『天地金乃神様』のおかげを受けずには地球上に生きている限りお世話にならない人間はいないのであります。

すべての宗教を超越して、すべての宗教も天地宇宙の働きのおかげを受けぬ限り立ち行かないのであります。

教祖金光大神様は神仏すべてを司る神である。神たる神の親神であるとお諭し下さいました。

また、天地金乃神様は、生神金光大神様に、

「金光大神の話すことは、天地の心と同根なり。」とみ教え下されました。

地球上には何十万というほど宗教がありまして、天地の芯と同根な

りと天地からお許しを得られた宗祖、教祖もありません。

生神金光大神様ただ一人であります。

その金光大神様がみ教え下されているのでありますから、み教えに間違いということはないと信じます。

教祖様は「痛いのが直ったから有り難いのではない、いつも健康なのが有り難いのである。」「物の道理というものは何でも一つである。天地の道理を説き教えられたのが、この道である。此の方の曰々話すことは、この理を説き聞かしておるのであるから、よく物の道理をわきまえて、道理に違わぬように信心せねばならぬ。」と天地の道理の一番に知らねばならぬことは、先にも申し上げましたように生命の有難さに、御礼を申し上げねばなりません。

二番目に知らねばならぬことは

『あいよかけよ』であります。

天地はすべて何事もあいよかけよで成り立っております。

天地がすべてあいよかけよです。

神と人間との間でもあいよかけよでなければ立ち行きません。

人間と物ともあいよかけよで始めて立ち行きます。

また、人と人もあいよかけよでなければ立ち行きません。

このように天地の働きを受けてすべてが成り立っているでありますから、教会の布教六十年もまたそのようにおかげの中で迎えたのでありますから、共々にしっかりと御礼を申し上げますに、十月のご本部での、生神金光大神大祭に一人も残らずお引き寄せを頂き、六十年の御礼を共に御礼を申し上げたいと思います。

個人参拝はできるだけやめて団体参拝にご協力下さいますよう、どう

ぞよろしくお願い申し上げます。

当教会の参拝日は十月八日(日曜

日)第三日、参拝予定の方は大至急お
申しでください。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『年頭にあたりて思うこと』平成十九年一月号

どなた様にも、明けましておめで
とうございます。

去年は、土佐高岡教会が初代教会
長野村トヨ親先生が高岡に布教され
て六十年のお年柄でありました。

おかげを蒙り記念大祭も麗しくお
仕えてきてそれぞれに大みかげを蒙
らせて頂きありがたいことでありま
した。

ここに新しき新春を共々にお迎え
できましたことを心からお慶びを申
し上げます。

新しき年を迎えて改めて、ここか
らの展開のおかげを蒙って参りたい

と思います。

信心と申しますと一般的には窮屈
なもの、年寄りがするもの、困ったと
きにするもの、と言うように信心を
決めつけているのではないでしょう
か。

実は信心はそんなに狭い考えのも
のではありません。

他宗教の事はよくは知りません
が、金光教の信心だけでみれば、決し
て窮屈なものでも年寄りがするもの
でも、困ったときだけにするものでも
ありません。

窮屈なものではないと言われても教

えがある以上それに従わなければ死
んで後に地獄落ちるとか、罰が当た
るとかよく言うではないか申す人も
ありますが、金光教にはそんな狭い
考えの教えはありません。

かえって世間のしがらみや、迷信的
な教えから、人間を広く深い神様の
世界に解放してくれるのが金光教な
のです。

神様は信心するしないに関わらず
この天地宇宙の中に命あるすべての
ものが、自分の意志に関わらずに生
かされて生きているのであります。

信心をさせて貰うというよりは、

意識しなくても生かされてある命に目覺て天地宇宙に感謝して生きて行くのが信心なので、いくら上手に拝んだりお唱えを上げたからと言つても信心しているとは金光教では言わないのです。

金光教祖様は「拝み信心をするな真でなければおかげは受けられない」「金光大神は一度も神様を拝めとも拍手せよとも教えた事はないぞ、ただ一つ真の信心をせよと教えたのである」と金光様、何を分かつてほしいと教えられたかと申しますと、天地の道理を分かつてほしい、天地の道理に沿つた行き方をしてほしいと願がわれているのであります。この願を端的に現された教えが、四代金光様の「世話になるすべてに礼をいふこと」だと思います。

私共はとかく自分の力や能力で生

きているかのように思い自分勝手に生きておりますが、よくよく考えて頂きたいことは、どんな方でもまずは天地にお世話にならないければ、生きられないということ、そして、親子の繋がりがあつて、人と人との繋がりがあつて国と国との繋がりがあつて、皆があいよかけよで繋がりがあつて立ち行くのであります。

だれにも世話にならずに生きられる人は存在しないのです。

ここに気が付き何事にもお礼と感謝の心で生きて行くのが信心の世界であり、先に申し上げましたように、信心とは決して窮屈なもので年寄りがするもので、困つたときだけするものでもないのです。

実はすべての人間が信心生活をさせてもらうことが、人間本来の行き方なのです。

おかげがあるかないかでするものでもありません。

この世に生まれた人は皆信心して当たり前なのです。

この当たり前のことが当たり前になつていないので、今日の社会のように親が子を殺し、子が親を殺し、子供達はもとより大人の世界にも人をいじめたり差別したりと言う本来人間の持つてはならない心を出しているのが今日の社会であります。

私共金光教の信奉者はこのことに気づかずにおられる方々に、人間は皆心の中に可愛いと言う神心があることを気づいてほしいと日々願つて参りたいと思います。

どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『天地金乃神大祭を迎え奉りて』平成十九年四月号

今年もはや天地金乃神様の御大祭の季節を迎え御本部広前の御大祭に始まり全国各地の教会の大祭が次々とお仕えになられ有り難いことだと思わせて頂きます。

年に一度の天地金乃神様の御大祭をお迎え出来るということは、天地のあらゆる働きを受けてお世話になって、命の働きを頂いて生かされている証しであります。

この尊いお働きを真一筋に感謝し、心を込めてお礼を申し上げる事こそが、御大祭の意義ではないでしょうか。

この命の尊さに気づかないでは本当の御大祭をお迎えする有り難い心にはならないのです。

この心にならねば、御大祭が負担

になったり、不満になったり、忙しいと言つて不足がでたりして重荷になるのです。

これでは、何のために御大祭をお迎えたのか分かりません。

どうか本当の命に目覚めて下さい。

辛いこと、悲しいこと、命があることが妬ましいと思われるほどの難儀に出会われたかも知れませんが、それでも命を頂き生かされている働きに受けて今になっているのです。

しかも天地のすべての働きのお世話になつて生きているのです。

この尊いお働きこそ、天地金乃神様の広大無辺のおかげであります。

この天地の広大無辺のおかげによつて命が育まれていること、しかし、そ

んな煩わしいことを思わなくても私は生きているとおっしゃる方も大勢おられることかと思われませんが、このお道金光教を信心させて頂く人々は信心のしていない方々と同じであつては何のために信心をさせて頂いているのか分かりません。

天地金乃神様は人間に真の信心を解つてほしいと願われているのです。

それは、「天地の道理」を生神金光大神様の御取次を頂いて悟り道理に合つた信心を進めて欲しいと願われているのです。

『天地の道理』とは、天地のすべての働きによつて生かされいる真実、祈祷や占い、日柄方角の吉凶などこれらはみな、天地の道理に反するものであり、真の信心ではありません。

これを改めて何事も生神金光大神様のみ教えに即した生き方をして真のおかげを蒙つてほしいと天地金乃神様は私共に願いをおかけになつて

おられるのであります。

この願いの成就を祈念しつつ、命に目覚めて真の御礼の天地金乃神大祭を共に喜び楽しみながら麗しい御

大祭をお迎えしお仕えさせてもらいたいと願つてやみません。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『お世話になつて生きる』平成十九年七月号

今年も早半年しが過ぎてしまいました。

ご承知のように日本には昔から六月の三十日には夏越祭とか大祓祭などといつて半年の祭典として神様に感謝申し上げるお祭りがお仕えになられてこられました。

わが金光教でも教祖没後百年祭ごろまでは御本部広前でも、お仕えになつておられました。が、百年祭を機に改めて金光教独自の祭典方法が教祖様の信心から生み出されたのであり

ます。

それによつて金光教からは大祓という儀式は廃止されたのであります。

教祖様は「忌み汚れは、わが心で犯すこともあり払うこともあり」と悟され、また「これまでは、忌み汚れを言う神ばかり。忌み汚れを言つていては、人は助からない。天地金乃神は、忌み汚れを言わない神である。ここをよく悟ることが大切である」と言われるように忌み汚れは大幣を振つ

ても、塩払いをしたといつても落ちたり退いたりするものではない、それは我が心の真より外には払うものはないことを金光大神様は我が身をもつて実践され悟られたのであります。

さて「真とはどうすれば出せれるのか」と問われれば教えて真が分かるものではないということであります。

それは疑わず神を信じるところに生まれるものであつてこれが真である真でないといふでいい現すことは難

しいのであります。

どうしても分かりたければ、今生きている事実をよく見るしかないのです。

なぜ生きていられるのか、私共は誰ひとりとして自分はどうして生まれてきてこうやって生きてきたと自覚して生きている方はいないのです。皆気が付いてみればこの世に生まれ生かされて生きている、この真実こそ誰ひとりとして疑える者はいないのであります。

この真実を疑わず真に有り難しと思うとき忌み汚れの無い真の心が生み出されてあらゆるものにお世話になつて生かされて生きている事が分かるのであります。

これこそが真実の生き方であり、真に通じる道ではないでしょうか。

このように申しましても真実か否かは分かりません。

それは心を神に向けたとき神からその心こそ真実である、真であると受け止めてもらえなければ、真実で

あり真であると申されないからであります。

つまりは天地のあらゆるものに、天地金乃神の御働きを実感して唯々お世話になつて生かされております。有り難いことであります。

勿体ないことであります。お礼を申すことしかないのではあるまいかと思ひます。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『信心とは人間が生きる大切なもの。』平成十九年十月号

日本人は、宗教をどのようにとらえているのでしょうか？

多分、有つても無くてもどちらでも構わず、また、どうでもよいとも思つ

ているように思えるのであります。

困った事が出来た時だけ、ご祈禱してもらえるところがあればそれでかまわないという、実に身勝手な考

えの人が大勢であろうか。

現実に信心をしておられる方々でも、本心を探れば八、九割は自分勝手な信心をされているのではないでし

ようか。

さて、金光教の信心とは、一体どんなことを信心と教えておられるのでしょうか。

御教えに、「ものの道理というものは何でも一つじゃ。天地の道理を説き教えられたのが、この道じゃ。此方かしておるのじゃから、よく物の道理をわきまえて、道理に違わぬように信心せねばならぬぞ。」と教えられ、金光教では『天地の道理に沿って生きることが信心の目的であり』、自分の思いをただ成しとげるだけの信心ではないということであります。

では難儀なことや困ったことなどをお願いしてはいけないのかと勘違いをされては困ります。

私共は天地の中に人間の力には及ばぬ働きを受けて生まれ、育てられて生きているのでありますから、病氣

災難や難儀な困った事などがあれば、お願いして神様のおかげを受けるのも道理であります。

しかし、そのことだけが目的になつては困ります。

そのことを通して神様のお働きを分からせてもらい、我々人間は一分一秒も神様、天地金乃神様のお働きなくしては生きていられないことを悟り、天地のあらゆる物の恩恵を受けて、生かされてあることに気づかねばなりません。

そこに気がつけば信心はどうでもよいというようなものではなく、絶対に必要不可欠なものであることが分かるはずです。

それでも分からないという人は、神様から御覧になると真に困った難儀な氏子といわれる人といえましよう。

神様の恩徳が分からせられても、

自分の気ままや、欲な事を考えて教会に参拝することを止める人があります。

何と神様に申し訳ない生き方でありましようか。

改まらせて頂きたいものであります。

そして、もっと自分を大切に頂きたいものであります。

自分を大切にすることとは、信心を大切なものと思えるからであります。

つまり信心は人を粗末にしない大切に生かす生き方でもあります。

信心を粗末にする人は自分をも粗末にされる方であり、人(他人)様をも粗末にする人でもあります。

信心とは人間が生きる大切なものと心得て取り組ませて頂きましよう。

(金光教土佐高岡教会長 野村頼璋)

『新年を迎えて思うこと』平成二十年一月五日

明けましておめでと〜ございます。

ここに、新しい年を迎え本当に有り難いことに思います。

年を段々取って参りますと、若い時には考えもしなかったことを、有り難く感じてお礼を申さずにはおられません。

朝、目が覚めると、若いときは目が覚めることが不足に思えたりしたのですが、年を取って参りますと目が覚めることが有り難くなってまいります。

四代金光様のお歌に、

「賜びしいのちあるありて 今日もめざめたりめざめしことは ありがたきかな」

「めざめねば 今日一日の生涯は

われにあらずと かしくみ思ふ」

とお読みになっておられますが、この年になつて、ようやくこの金光様の読まれたる御心が少し分かったように思われます。

命の目覚めがなければ、今日の一日が始まりませんし、辛いことも楽しいこともすべてがないのです。

どんなに辛いことであっても目が覚めて命があつて始めて辛いと思えるのであります。

辛いと思えることに命のお礼を申さねばなりません。

お礼を申すことにより、また楽しみなこともあるのです。

皆様もご承知のように、私は腎不全により人工透析を週に三回病院に

行き、四時間の透析を受けなければ生きてゆけません。

人は週に三回も透析を受けて大変ですネと言つて下さいますが、私も始めはそういうにも思つておりましたが、今は本当に有り難いことだと思つております。

昔であればとうに死んでいるところを今は透析によりこのように生かされているのであります。

昔は腎不全ともなれば「金の切れ目が命の切れ目」と言われたものでありますから今は本当に有り難く感謝しても辛いなどと言つては相済まないことに思われます。

辛いこと、悲しいこと、苦しいことなどありまして、また楽しい、幸せなことも沢山あるものです。

神様は「天地のなさる」ことに無駄事はない」と申されております。

よくよく考えてみますと、確かに命を頂いていれば悪い日ばかりはありません。

心ひとつで、いくらでも楽しい日のあることを金光様は「和らぎ喜ぶ心」

『天地の恵みの中に。』

『平成二十年四月』

と申されて「和賀心」になることをみ教え下されました。

今年もいろいろな辛いことも、悲しいことも苦しいこともあると思われませんが、天地の神様の「天地のなさる」ことに無駄事はない」との思し召し頂き、「世話になるすべてに礼をい

ふ」を生活の全面にわたって信心の土台としての「人を助けて、神にならせてもらうがよい」との御神願成就のお役に立つおかげを蒙らせて頂きましよう。

（金光教土佐高岡教会長 野村颯璋）

この宇宙に生きとし生きるものは、一つとして天地の恩恵を受けずに、生きているものはないのであります。

あらゆるものの生命の源こそが天地の働きであり、これこそが私共が親神様とお慕い申し上げている、天地金乃神様そのものであり御神徳であります。

この御神徳の現れが、生命あるすべてのものが生きてゆくのに絶対必要なものを天地宇宙の中に遍満させて地上に海に海底にと人間の考えが及ばぬ所にまでも働きくだされ生きる力を与えられていることに、この天地に神様の働きを悟る時に四代金光様がみ教え下された「世話になるすべてに礼をいふ」と言われ

る、この心が自然と態度となって現れ言葉となって現れたのでありましよう。

ここにこの道の大切な信心があるのだと思います。

人間は神様や仏様など人間の力に適わぬ事のみをかなえて貰う為にしか信心とか神様とか仏様に縋る、そのことを世間ではみな信心と言う、

それも信心ではあるが困ったときだけ助けて貰うのが信心とするなら困らないときは信心なんて必要ないといふことになります。

しかし、先に申したように天地一切の働きによって生かされて生きているものとして常に神様の働きを感じ感謝し、人間の力に及ばぬ働きに絶り生きてゆくのが信心でありましよう。

そこには思い通りに願が適ったからおかげとか、適わなかったからおか

げでなかったといふ、願が適う適わないのが信心ではなく、信心とは天地の中に如何に生きるかが、信心でなくてはないのではありませんまいか、ゆえに教祖様は「人の身の上につして無駄事はなされない」と教えられ一切のことがおかげであると申されているのであります。

この道の信心をさせて貰うということは、天地の道理を教わりて辛くても苦しくても、どんな難儀の中にも天地に生かされる人間として天地

の道理として信心辛抱させて貰うことにより、いつ時節を頂くのでありましよう。

これを信心のおかげと言うのではないでしようか。

天地のお恵みによって生かされているお互いでありますから、何事にもお礼を申すことを大切にしておかげを頂いて進ませて貰いましよう。

(金光教士佐高岡教会長 野村穎璋)

『信心の目を開く』平成二十年七月号

教祖生神金光大神様は私共に、天地の親神様の御心を次のようにお諭し下されております。

「信心はせむでもおかげはやってあ

る。」

お示し下された御心は、真にもつたいないことであります。

この地上に生かされているすべて

の生き物が、天地の恵みを受けて生かされているといふことが、おかげであるのです。

おかげをもらっているのであれば、

信心なんか、しなくてもよいのかと思われるかも知れませんが、それは間違いであります。

信心をせんでもおかげを頂いてるということは、人間であれば信心をさせて頂いて、信心をせんでももらっているおかげに対して、お礼を申すのが人間としての道理ではないでしょうか。

自分の力で生きている人間は一人としてこの世には存在はしていないのであります。

このことをしつかり悟ることが、人間として生きる根本であります。

信心をしない人は自分の力で生きていると思っているからであります。果たして本当に自分の力で生きられるのでありましようか？

それは大変な誤解であり誤りなのです。

考えてみて下さい。

私共がこの地球上にいるということがすでに天地の働きを受けていること、この天地の働きがなければ一切のことが無なのであります。

自分自分と言っている、その自分すらないのであります。

そのように考えてみると、この世に生まれ出ることがすでに、「信心せんでもおかげはやつてある。」と言われることを、信じない訳にはいかならないのでありましようか。

自分の力だけでは息ひとつもできないのです。

水・食物・人物とあらゆる物にお世話にならねば、どんな人間も一時も生きてはいられないということを知るべきではないのでありましようか。

これが分かれば、信心させてもらうということが当たり前であつて、信心は必要であり不可欠のものではないのでありましようか。

信心は不必要なもの、信心せんでも生きていられると思ひ上がっている人は、神様からご覧になると、なんと難儀な可愛そうな人間であらうかと、お嘆きになられていゝのでありましよう。

神様はじつとして信心の目が開かれるのを待つていられるのであります。

「信心しておかげを受けてください。」

と懇願なされておられます。

それを教祖金光大神様にお頼みになられたのであります。

私どもはすでに金光教にご縁を頂いている者でありますから、日々教会にお引き寄せを頂いて、信心の目を育て、少しでも親神様に喜んで頂ける氏子にならせて頂いて、神人ともに助からせてもらいましよう。

そして助けられた働きを継ぎ、人

に伝えさせてもらい、おかげを頂き
ましよう。

（金光教土佐高岡教会長 野村穎璋）

『信心しながら信心のなき人』平成二十年十月号

教祖様は神様の御心を、次のように教えになっておられます。

「人間がおかげを受けてくれなければ、神も金光大神もうれしくない。

人間がおかげを受けないで苦しんでいるようでは、神の役目が立たない。」

人間が立ち行かなければ、神も金光大神も立ち行かない。」

とお示し下されております。

これはどういうことでありましようか。

私共はそれぞれに信心をしているように思っておりますが、神様からご覧になって本当に信心をしていると

言えるような信心をしているでしょうか。

どうも神様から「ご覧になると」お前それで信心をしていると思っているのか」と言われるかも知れませんね。

天地の親神様が「信心しておかげを受けてくれよ」と諭される信心とは、どんなに苦難のなかにも、どんな嬉しい時でも、変わる事なく、神様を疑う事なく、どんな時でも神様を忘れることなく、神様を信じてどこまでもついて行く、その覚悟がどれだけあるかが、信心しているものと信心していないと言われる人にしていて、してないと言われる人

別れるのではないでしょうか。

人間はとかく難儀な時には神様にすがりますが、それも難儀が大きく耐えられない程の難儀にあえば、今度は神様を疑い「信心しても何のでもない」と信心を捨て去り、やけくそになったりしてしまいます。

これでは信心があるとか信心をしているとは神様は思われないのではなからうかと思えます。

信心をしていてなかなか私は金光教の信心をしていますと言えない、恥ずかしいと思うということとは、信心が本当に分かっていないということ。

また自分の生き方が信心になつていないことが、信心していると言わせないではないでしょうか。

だからこそ信心に自信がないのでありますまいか。

信心を自信をもって語られるということは、神様をしっかりと掴んでいらっしゃるということです。

おかげをしっかりと受けておられると、それが自然に何げなく人にも信心を話しているのだと思います。どんなに難儀な時でも堂々と信心が話せるようになりたいものです。

教祖様も信心されて難儀がなくなつたから信心を話されたのではないのです。

信心しながらも難儀を抱えながら、神様を信じて難儀に立ち向かわれ一つ一つおかげにしていかれた。

ゆえに「信心は一生が修行である」とお諭し下されたのだと思います。

とかく世間では信心をすると、もお難儀や苦勞の悩みなどはなくなるものと思われているようですが、そんな信心はどこにもありません。

そんな信心を言う宗教にとかく人間は惑わされ、かえって難儀をする人があり、そこから信心をないがしろにしているのではないのでしょうか。

信心は難儀から逃れるのではなく、難儀に立ち向かい、難儀と共に生きてゆく力を得る、それが信心というものではないのでしょうか。

信心しながら信心のなき人と言われないような信心にならせてもらうために、日々神様にすがり、おかげを受けてまいりたいと思います。

(金光教土佐高岡教会長 野村穎璋)

『新年に道の立ち行きを祈りつつ』平成二十一年一月号

明けましておめでとつございませう。

昨年中は皆様のお祈り添えを頂き

つつ、命のおかげを蒙り、人工透析を受けながら元気に至らぬながらも御用に使つて頂きました。

その中にあつても、だんだんと年をとらせてもらっていますと、先のことを考えるようになるものでありま

す。

まず人工透析の身ということもあります。他にも私は医師より脳梗塞と告げられてもおります。

そうなると病気のことゆえ、知らず知らずのうちに頭でもぼけたらと後のことを考え、急に代替わりとなったら後の者も困るであろうから、今の時節に教会長の座を引かせてもらい、後の者に教会長の御用をしてもらいながら、私は御用の支えとなつて、教会のこと、御信者様のこと、これまでの御用を通じて知っておることを伝えながらの後祈念の御用をさせ

て頂きたいと思い、家族会議を開き、皆の者に私の体の都合と、教会長としての御用が十分に務めることが出来ないことを伝え、教会長を譲ることを話し合わせて頂きました。

皆様方には、先代が亡くなられてより、至らぬ中にも私が教会長の重き御用に立たせて頂き、今日まで何かと至らぬ不行き届きの御用の中にも、三十六年の長きにわたつて神様、金光様、先代の御霊様、御信者様の厚きお祈りを受けて、かつがつも今日まで務めさせて頂きましたことの御礼を申し上げます。

家族で話し合う中で、それぞれの思いを聞かせて頂き、教会長を二男の野村清治に後を継いでもらうこととなりました。

何かとお世話をかけることもありましようが、皆様のお祈り添えを賜りながら御用が務まりますよう、よろしくお願い申し上げます。

これからは教会長を立て、後祈念に務めさせて頂きたいと思ひますので、よろしくお願い致します。

(金光教士佐高岡教会長 野村頼璋)

『おかげは和賀心にあり』平成二十一年五月号

私は昨年の十二月六日の朝、目覚めると体の調子が悪くなっており、透

析日でもありましたので車で病院まで送ってもらい、透析を受け、主治医

の先生がおいでになり診察して下さい、先生より、

「透析後は帰らずにそのまま入院しなさい。」

このことで入院することとなりました。

私は（まあ、二、三日で退院できるであろう。）と思っておりますが、熱の出入りが落ち着かず、胸部のレントゲンを取り検査の結果、肺炎との診断により治療をして頂いております。

治療を受ける中で肺炎の方は大分良くなりかけると、今度は右の目が何となく見にくくなり眼科に掛かる、と、

「直ぐに眼底のMRRの検査を受けてきなさい。」

このことで検査の結果は、

「眼底の血管に血液が流れていないので、残念ながら右目は失明するかもしれない、他の良い眼科や医科大の眼科なり紹介してもよいが、今の

医学では他の病院に行っても同じであらうと思います。」

このことで、あきらめておりました。

すると今度は、また右目の眼球の

外の膜との間が出血し眼球を押して、瞼がつむれないくらい前に押し出され、その目を診察して下さった眼科の先生が、

「こんな目は初めて見た。」

と言われるくらいひどい目でした。

先生より、

「少なくとも一ヵ月以上はかかるかもしれない。とにかく暫は安静にしてください。」

と言われ、右目はもう失明しても仕方がないと諦めて、神様には今日までの六十年余りのお礼を申しつつ、二カ月の入院から退院となりましたが、失明もせずに、正常に見えるとは参りませんがおかげを頂いて退院し、今日となっております。

この様になるとは思いもしなかったのですが、入院と同時に教会長を譲つて、御用してもらつたこととしたのがおかげでした。

目がハッキリ見えにくいので祭詞を作成したり、読むことがしにくくなりましたので、考えて見ると、実に神様は困らぬように、先々まで見抜かれて、すべてお繰り合わせを頂いてきていることが、本当に分かります。

金光大神様は『おかげは和賀心にあり』と御教え下さり、先の金光様は、

「何事もおかげの中で、できているのですから、しっかりとお礼を申しませう。」

と御教えを下されております。

人間は生きていますのですから、病氣もし、目も見にくくなり、とにかく様々な生きることには不自由なことが起きて、生かされている証拠であ

り、おかげの中のことであり、自分の心次第の『おかげは和賀心にあり』で

あります。

（金光教土佐高岡教会 野村穎璋）

『天地の道理を求めて』平成二十一年八月号

私たちは信心を好きだからするか、信心は嫌いだからしないとかというようなものではなく、信心は嫌いという人でも動物でない限り、人間はどんな鬼のような人でも人間の耐えられる限界を越えた時神仏に縋るものである。

それが信心をするきっかけともなつて、かえって好きだと言つてた人よりも、逆に熱心に信心される人となることがよくあります。

例えば、教祖様の時代に岡山県の今の笠岡市から奥様の病気がきつかけで、奥様より一生に一度のお願い

いと懇願されて、教祖様の所にお参りするのでありますが、信心することとは人に恥ずかしいことである、弱い人であるという思いなどがあり、思い悩みつつも教祖広前にこられ、中に入らず庭でうろうろして中のお話しを聞かれ、信心の眼が開かれるのであります。

その後は奥様の病気も全快し、熱心な信者となり教祖様の右腕と認められるほどのご信者なり、神様より「笠岡金光大神」との御神号を頂かれたのであります。

この様に信心をなさるようになる

のは、この方だけではないと思うのであります。

信心を嫌いと言う人でも、信心が分らないから嫌いとかいやだと言っているのではないかと思うのであります。

どんな偉い人でも、神仏を敬うような心を失った人は、人からも敬ってもらえなくなるのであります。

それは目に見えないそこに天地の道理があるからだと思ひます。

人間の力の限界、能力の限界がわかれば、自然に神の力人間を超えた力に縋るものであります。

人間に神を超える力や能力があれば、科学者、医学者、能力者が、何千年、何百年昔に、何の科学も医学も能力もない時代に生きられた人の言われた話を聞くものでしょうか。

それは、今日の時代も超えた、科学や医学でも解えぬものが宗教にあるからではないでしょうか。

医学が進み人間が人間を作り出す時代が来ようと、天地自然の力無くしてはそれも不可能だと思えます。

そうしてみれば、やはり人間には限界があるのが分かります。

信心は、好きだからするとか、嫌いだからしないとかというように考えてするものではなく、人間として生まれながらに信心する心は備わったものではないでしょうか。

それは、病氣から逃れたい、苦難から逃れたい、そればかりが信心では

ないのです。

もちろん、病氣も直らなければなりません、苦難からも逃れなければなりません。

それも信心の大切な要素であります。

信心の大切さは、病氣もなく、苦難もなく平々凡々と生きているときこそ必要なものであります。

ところが人間愚かなもので、病氣もなく苦難もなければ信心をしない。

しかし、人間は自分の愚かさ凡夫さに気づかなければなりません。

信心は他人からや権力者、政治から押し付けられてするものでもなく、信心は自由なものなのです。

それゆえに、信心をする事なく自由に分勝手に生き、そしてそこから、難儀を生み出し、それをあたかも世間や人のせいにして、嘆き悲しみ

苦しんでいる人が多いのです。

金光教祖様は「人間は万物の霊長であるから、万物を見て天地の道理にあつ信心をせよ。」とみ教えになつておられます。

ここで今一度、天地の道理とは何か、教祖様は「天地の道理とは、国で言えば法律のようなものである。法律を犯せばお仕置きに会つのが道理である。」と言うように言い換えれば、天地の道理とは「天地の法律」である、天地の法律は信心の勉強を重ねることにより、段々と分からせられて守るようになってくるのであります。

教祖様は「信心も手習いも同じ」と、一段一段と進んでゆくのであると教えられています。

多くの方が信心を毛嫌いするのは、修行と言うて、断食や寒中に水をかぶったり、何千回も何万回もお経

や、呪文を唱えたり、教えに背けば地獄に死んだ後で落ちるとかで脅かされる、信心すればお金を沢山お供えしなさいとか、物を供えなさいとか、物を買えば因縁が切れるとか嫌なこ
とばかりを押し付けてくる宗教に惑わされる、そんなことが信心を嫌がるものとなつてはしないかと思うのです。

さて、わが金光教ではどうでしょうか。

教祖様は「断食をしたり寒行とい

つて水をかぶつたりするのは行ではない迷いというものである、この方の行は家業の業である。」と言われ、また「金や物ではおかげのもとにはならない。氏子の真心でおかげをつけるのである。」とまた、死後については「天国もなければ地獄もない、形を無くしてどこへも行くのでない、ここにいるのである。」とも教えておられる。

分かつて頂きたいことは、信心を無理に進めているではありません。

ただ金光教の信心の良さを知って頂きたかったのです。

金光教のご信者様方には、大変に優れた学者の方や医師、芸能、文化人も数多くおられます。

信心にもっと自信を持つておかげをいただきましょう。

信心は天地の道理に合う信心ぞ

天地の道理に合わねば信心でなし

(金光教土佐高岡教会 野村颯璋)

『立教百五十年をお迎えして』平成二十一年十一月号

教祖様が天地金乃神様より安政六年十月二十一日、(現在の十一月十五日)立教神伝をお受けになられてから、今年で百五十年の記念のお年柄

をお迎えし、真におめでたいことでもあります。

私事ではありますが、今から五十年前の立教百年祭には大阪から阿倍野

教会の団体参拝の列車で参拝したことがございます。

まだその当時には信心もなく、須崎にいた一番上の姉がご縁を頂いた

頃で、姉のお手引きにより、母や兄弟は百年の記念大祭ということで、須崎教会から初めての「ご本部参拝を、お引き寄せ蒙らせて頂いたの」でございます。

御神縁と云うことは本当に今考えてみると不思議なことでございます。

それからほどなくして、大阪の会社を病気で止めて東津野に帰り、病気全快後新田にある紳士洋服店に見習いとして入り一年もしないうちに腎臓病に罹り、せいぜいで半年の命と診断され、須崎教会に「ご縁を頂いていた姉の導きにより、私も須崎教会にお引き寄せを蒙り、姉とともに朝は三時過ぎに起きて、四時からの朝の御祈念参拝をさせて頂いて、親先生より「金光教は毒断ちの道である、何でも好きなものを頂いておかげを受けなさい。」とのみ教えを頂

き、母と姉は私がまだ若いときで、お肉が好きでしたので、それならどうせ半年の命なら好きなお肉を食べさせて、死んで後に悔いのないようにと、その晩にすき焼きをして食べさせてくれたのでございます。

すると朝になり起きてトイレに行き、出させて頂いた小便を見ると、血の小便どころか、きれいに澄み切った小便に驚き、それを機に腎臓病は全快し、医師も不思議だと首を傾げたのであります。

その後、三代金光様に御取次を頂き、「お道の教師にならせて頂ければ立ち行きましょう。」とお言葉を頂いて、教師とやらせてもらい、今日になっております。

まさか五十年前には、思いもよらないことであります。

私のような者に金光様は、ない命をお与え下さり、その上にお道の教

師にまでもお取り立て下さり、この十一月十六日には六十九歳の年を迎え、勿体ないことと思わせてもらっております。

神様は本当に先へ先へとお繰り合わせを下さり、私が困ることのなきように、病気で入院すると直ぐに、会長を下がり譲ることとなり、そのことが今日、私の体が不自由になり、思うような御用がでなくなることを見越しておかげを下されたように思っています。

こうして、代を譲ることができのち、一重に教祖様が立教神伝をお受け下さり、人が助かり、道が伝わり、百五十年の長きにわたる継承の賜と、お礼を申さずにはおられません。百五十年のおかげはさらに続いて、百六十年、百七十年、二百年、三百年というように人類の続く限り継承されねばなりません。

ともに信心継承を祈りとして、自身の継承こそ命と願わせて頂きますよう。

お手引きをさせてもらうことは、教会のためではないのです、自分が

本当の助かりを得るためであるのです。

神様は「人を一人助ければ一人の神、十人助ければ十人の神。」と教えられ、また「人を助けて神にならせて

もらうがよい。」とも教えられております。

共々におかげを蒙らせて頂きますよう。

(金光教土佐高岡教会 野村顕璋)

『新年をお迎えして思うこと』平成二十二年一月号

明けましておめでとうございませす。

昨年正月は病院に入院したままお迎えし二月の初めにやっと退院しましたが、体力が戻らず次第に弱り、両手は肩から痺れ、字はまともに書けず、足も弱り車椅子に乗せて貰ったり、近くのところはシルバーカーを押してどうにか歩かせて貰っているようないであります。

しかし、そんな中でも、おかげさま

で不自由な中でもどうにか自分の手で食事が頂け、便所もひとの手を借りずにさせて貰っていることは本当にありがたいことだと思わせて貰っております。

体が思うようにならなくなつて、思うことは、四代金光様が

「何一つ世話にならねばなし得ざる、われぞと思う世話になりつつ。」

とお読みになつたお歌がこれ程身近に感じたことは元気なときには感じ

なかつたことでありました。

四代金光様がお示し下された

「世話になるすべてに礼をいふことろ。」

の足らなかつたことをお詫び申し、改めてしっかりとお礼の信心を進めさせて貰いたいと思います。

ここに改めて新年を迎えて、昨年の足らぬお礼の信心を見直して、み教えの

「信心は年が行くほど位がつくもの

である。」
とみ教え下されております様に、位

をつけて貰えるようなお礼の信心を
一層進めて、お役に立たせて貰いた

いものと思っております。
(金光教土佐高岡教会 野村穎璋)

『介護を受ける身になって思うこと』平成二十二年二月号

私はこの間二、三カ月前まで、まさか自分が介護を受ける身になるとは思いも及ばないことでした。

それは自分のことは自分で何でもしないと気が済まないという性格から、人の世話にならなければ生きて行けないという屈辱感、それは私にとつては耐えられない事だと思っておりますのです。

自分のことが自分で出来ないもどかしさは、私に取りましては何とも情けない姿にしか思えないのであります。

しかし、自分ではどうしようもな

いのです。

歩く一歩にもおかげを受けずには、歩くことが出来ない自分である事に気づかされ、一歩一歩お礼を申しつつ進ませて頂いている自分であることに気づかせてもらいました。

そこで初めて、

「ああ自分の力で歩いているのではない、歩かせてもらっていたのである。」と有り難く、お礼を申さずにはおれない自分というものが、そこにいたのであります。

四代金光様がお歌に詠まれた、

「何一つ世話にならねばなし得ざる

われぞとおもふ 世話になりつつ」と、お示し下されたお歌こそ、我が身に下されたみ教えであると、有り難く拝するのであります。

今までは妻や子供が私にしてくれるのは、夫であり父親であるから、して貰っても当たり前という思いがありました。それは大変な間違いであつたということに、気づかされたのであります。

例え妻であり、子供であつても世話になれば、お礼を申すのが当たり前であつて、当たり前のごことが当たり前に言わないことが、びつとすると難

儀を生み出す元になるのだということとであります。

介護施設に行きますと、子供か孫のような若い男の子や女の子が、私の手を取って手を引き、風呂に便所にと、また肩を揉み下着に至るまで、まるで着せ替え人形の様に取り替えてくれるのです。

本当に有り難いこととあります。どうかすると、老人は若い人からは、臭いとか汚いものでも見るかのようには思われがちですが、そんなそば

りを見せずに、お尻に至るまで洗ってくれます。

どんなに頑張っても一人では生き切れないこと、必ずどこかで、目に見えずともお世話になって生かされている自分であることに、お礼を申し生かさせて貰わねば、相済まないこととなります。

元気でいた時も、どれだけの方にお世話になって生きてこられたかと思ひますと、お礼の足りなさに唯々お詫び申すしかない自分であると、

思い知らされるのであります。

すべてがお世話になって出来ていることにお礼を申し、そのお礼の至らなさにしつかりとお詫びを申し、おかげの中で生かされ、何事も出来ていることは、天地自然を始め、人、物、時、ご先祖と目にこそ見えぬ、すべての働き一つ一つ、お礼を申し進ませて頂きたいと思っております。

(金光教土佐高岡教会 野村颯璋)

『信心をさせて貰うのに大切なことは』平成二十二年6月6日

信心の世界には今も昔もないというところであるが、今の人間は学問がつき過ぎて、信心よりも先に学問による、み教えの解釈が進み、理屈が先

になって、それでいかにも信心が分かったように思っていたり、できているように思ってしまう。

しかし、信心の世界は信心をさせ

て貰い、先に信心の実践しか本当の信心は分からないのではないかと思います。

信心はとにかくにも実践が先で

あります。

分かっただけでは信心ができたとは申せません。信心ができているかどうかは、実践して始めて分かるものなのであります。

信心は分かっただけでは、なんにもなりません。実践して神様のおかげが現されて、それで始めて信心が分かるのであります。

神様を現さずに信心は分かりません。

では神様を現すにはどうしたら神様を現せるかと申せば、四六時中、神様を離さない生き方をするしかないでしょう。

そうすると起きて来るのが、みなおかげであるということが、だんだん分かるようになって参ります。

信心をしつかりと分かせて貰うには、神様に対して素直になること、

何事にも言い訳をしない生き方となること、自分を出さないこと、何事も受け切つて行くこと、神様と共に生きることであると思います。

これが信心の真に大切なことであると思います。

この心なくしては信心にはなりません。

どんなによい話をされても、それは信心の話ではないのであります。それは単なる道德の話に過ぎないのであります。

例えば「人の身が大事か、わが身が大事か。人もわが身もみな人である。」という、金光様のみ教えがありますが、これは道德的なみ教えですが、金光様がみ教えになられたのは道德ではないのです。

金光様のおっしゃられた言葉は、中身が信心に基づく「人も我が身も神

様の氏子である」と言う意味であり、単なる平等と言う道德的意味合いではありません。

教祖様のみ教えにも沢山、道德的なみ教えがありますが、しかし、金光様のおっしゃる言葉は、すべてが信心に基づき、神様を抜きにしたみ教えではありません。

解釈する人が信心なき人は、本当の信心の解釈にならないと思います。

如何に信心を大切にして、信心による話ができるかによつて、人に信心が伝わるか伝わらないかが決まつて参ります。

共に信心するものとして、素直に言い訳せず、自分を出さず、神様と共に生きて、生きた神様を人様にも伝えて参りたいと思います。

(金光教土佐高岡教会 野村穎璋)

『ありがとう』平成二十二年十月号

今月は教祖様がお隠れになられた
お日柄の月であります。

金光教は教祖様の生前中の生きら
れ方を、お手本にして進めていくの
が金光教の信心であります。

ではどのような生きられ方をなさ
れたのでありましょうか、神様より実
意丁寧神信心な氏子と言わしめるほ
どの、神様を中心にした絶大なる信
頼をえる生き方を進めて行かれたの
であります。

この生き方は生涯、貫かれた生き
方でもあります。

その生き方とは、嘘をつかない、言
い訳をしない、真正直な生き方、神様
を立て抜く、心変わりをしない、神様
と共に生きる、疑わない信じ切る、神
様に対してこれで済んだと思わない

と言う心、このような純粋な一途な
心であられたのであります。

こういう心を神様が御覧になり、
実意丁寧神信心な氏子と言わしめ
たのであります。

私共はとかく神様に対して言い訳
をする。

例えば教会にお参りする時に「忙
しくてお参りする間がなくてご無礼
しました」とか言うところが実は遊
びに行ったりする間はあったのに忙
しくてと言う。

ここで教祖様はお参りをする暇を
つくってお参りを大切にする。

そしてお参りができたことに対し
て「ありがとうございます」とお礼を
申される。

自分が繰り合わせたとは思わな

い、神様のおかげでと思う。

何事においても自分がしたとはみ
じんにも思わない。

すべてが神様のおかげと受け取り
御礼を申す。

私共はとかく何事にも「自分が、自
分が」と言うように、神様のおかげと
言うより自分が先に立っている。

そこでおかげが違ってくるのであ
ります。

自分ができることは無いのです。

すべてが神様のおかげでなされて
いることを、ハッキリと知らねば信心
にはならないことに気づくべきでし
ょう。

お道の信心は、寝ること、起きるこ
と、立つこと、座ること、顔を洗うこ
と、歩くこと、食事ができること、仕

事ができること、遊ぶこと、一切が神様のおかげの中でできていること。

それ故に、すべてに御礼を申し、すべてに「ありがとうございます」との心を持ち続けて参らなければなりません。

人には御礼を言うても、とかく神様にはありがとうの御礼の心が足りないことに気づかねばなりません。

人が何か助けてくれても、実はその裏には神様がその人を通して私を助けてくれている、と言うことがあるからであります。

言い訳をしたり、嘘をついたり、素直になれないのも、みなすべてがおかげであることに気づかないからであります。

それは言い換えれば、神様が常に

心にないからであります。

一切が神様のおかげのたまものであるとの自覚をハッキリと持たねばなりません。

このことが信心の稽古なのであります。

すべてにありがとうの心を持って信心の稽古に励みましょう。

(金光教土佐高岡教会 野村颯璋)

『新年に思うこと』平成二十二年一月号

明けましておめでとうございませす。

昨年も日々おかげの中に生かされて、透析治療やデイサービスにも通わせて頂き、皆様にお世話になって過

ぎさせて頂いての今日であり、真に有り難く御礼を申し上げております。

今年も「世話になるすべてに礼をいふこと」で信心の稽古をさせて頂きたいと存じます。

共に信心を進めて、おかげを蒙らせて頂きましょう。

(金光教土佐高岡教会 野村颯璋)

『神の願いに生きる』平成二十二年二月号

この世に生きるすべての生命体は、自らの意志に関わらずに生きております。

生きているだけではなく、自らもまた生きたいと願って生きてもおります。

ではなぜに生きていきたいと思うのでありましようか。

それは天地の、自然の法則によるものと思われるのであります。

自然界にそう言う働きがあるからであります。

自然の働きを金光教では天地の道理と申されておりす。

この天地の道理こそが、神様の御働きに間違いないのであります。

その中にありて「分けても人間は神の氏子」と申されて、天地の道理を

知らずに難儀苦勞をしているのが、天地金乃神様はたまらないのであります。

それ故におかげを受けて欲しいのであります。

それで天地金乃神様はこの世に生神金光大神をお差し向けになられて、金光大神の言われる通りの信心を見習い、おかげを受けて欲しい、そしてそのおかげを次々に伝えて、同じ信心をする人を助けて欲しいと願われているのであります。

一人でも多くの人に信心を伝えるのが、神様への一番の御礼となるのであります。

それが神様の人間に対する願いでもあるのです。

神様の願いはただ一つ、自分が信

心しておかげを受けたことを人に伝えてゆく、そして「人を助けて神にならせてもらうがよい」との思いを受けていききたいものと思うのであります。

神にならせてもらうということとは、生神になるということであります。

その生神とは社会一般に思われる「いわゆる人の心を見抜き見通しである」というような神ではないのであります。

金光教でいう生神とは、一人でも多くの人に信心を伝えて、信心をする人を導くことが生神となることでもあります。

神の願いに生きるということは、おかげを受けて神様の御働きを世の

中に現すということであります。

神様の働きを世に現すことは、おかげを受けても人に話しをしていかなば、神様の働きは世に現わしたこ

とにはならないのであります。

神様の願いも現われないのであります。

人を助けることが、我が願いとな

らせてもらいたいものであります。

それが神様の願いに生きるようになるのであります。

(金光教土佐高岡教会 野村穎璋)

平成二十三年五月号より

長年、腎不全を患い透析治療を受けており、今年二月十一日より敗血症にて入院治療し皆様のお祈り添えを頂いておりましたが、平成二十三年四月五日(火)午前五時三分、齢満七十歳四ヶ月二十日にて、おかげの中で家族に見守られながら御帰幽になられました。

生前中にお世話になりました方々には厚く御礼を申し上げます。

おくりなは、

「故野村穎璋美志道次秀貫歩大人(の

むらひであきうましみちつぎひでつ

らゆきうし之霊神」と高知親教会親先生に賜りました。

故野村穎璋大人のみ教え

◎ 神様は何事にもルーズ(※1)なことをお嫌いになる。

※1(しまりのない。だらしないの意)

◎ 教祖の神様、歴代金光様の御教えから一ヶ条、我これにて救われ給う

というものを見付け、一筋に一生涯求め通すことが 大切。

◎土佐高岡の初代は、御本部、親教会、親先生が一番大切に進められました。

何事にも親先生と言われることには、意義がさらさらなかった。

今は親先生にでも平気で冗談と言うが、言わない方がよい。

【故野村穎璋大人の手帳／教会長の心得／抜粋】

故野村頴璋大人のお歌

○ 日天四様 地上に生きる 総べのものに

今日もひとしく 命与ふも

○ 一日中 お輝し下され 有難き

西の上にと 静かしおかくれ

○ 日天四様の 輝す下には 善悪の

差別なし すべてが平等なり